改訂 女子國文 巻六

教科書文庫
4
810
42-1923
2000064442

42175
教科書文庫
4
810
42-1923
20000
64442

資料室
375.9
Ha7

大正十二年十一月十四日 文部省檢定濟 高等女學校國語科用教科書

文學博士芳賀矢一編

改訂女子國文

東京 冨山房發兌

広島大学図書 教 64442 図書

教科書文庫 4 810 42-1923 2000064442

広島大学図書 2000064442

改訂女子國文卷六

目次

一 戊申詔書の聖旨と現下の狀態其の一……一頁
二 戊申詔書の聖旨と現下の狀態其の二……七
三 讀書……一〇
四 書齋(自修文)……一三
五 博雅の朝臣……一六
六 禁庭の野分……二一
七 蘇武……二四

八　覺悟……三〇
九　舊都の月……三三
一〇　蟲の聲……三七
一一　修身要領（自修文）……四〇
一二　母の形見……四四
一三　みやび……四八
一四　秋冬の歌……五六
一五　實體實相……五七
一六　本多重次……六一
一七　ユーゴーの母……六八

一八　武藏野日記……七六
一九　秋冬の句……八一
二〇　花合戰（自修文）……八八
二一　和宮內親王の御婦德　其の一……九一
二二　和宮內親王の御婦德　其の二……九六
二三　朱買臣……一〇二
二四　女流の俳諧……一〇五
二五　手紙二章……一〇九
二六　手紙を書く心得（自修文）……一一三
二七　潮まつ間……一一六

目次

二八　世界の歌枕　其の一……一九
二九　世界の歌枕　其の二……二七
三〇　諺と道德……一三三
三一　三井家創業の賢婦人……一四一
三二　日本の婦人と歐米の婦人（自修文）……一四六
三三　獨創力……一五二

終

改訂女子國文卷六

一　戊申詔書の聖旨と現下の狀態　其の一

杉山重義

局を結ぶ

膺懲

明治天皇が戊申詔書を我々國民にお下しになつたのは、明治四十一年十月十三日で、其の歳が恰も戊申に當つて居たので、戊申詔書の名があるのである。其の當時の國情を顧ると、日露の戰役が我が國の勝利を以て局を結び、世界の最大國たる露西亞を膺懲して、其の光輝を天下に揚げたとい

宸襟を惱ます

ふので、人心漸く緩んで尊大驕慢となり、奢侈贅澤の惡風社會を襲はんとする兆があつたので、聖明叡智な先帝は、大いに宸襟を惱ませられ、下し給うたのが即ち此の詔書である。

華ヲ去リ實ニ就ク

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益〻國交ヲ修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ內國運ノ發展ニ須ツ戰後日尙淺ク庶政益〻更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ

淬礪ノ誡

協翼

開國進取

汚隆消長

抑、我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ誡ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威德ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

開國進取は我が國建國以來の國是であつて、二千六百年の歷史は既に此の事實を證明して居る。けれども汚隆消長は人世の常、時には綱紀緩み人心荒むことあるを免れなんだ。明治維新は即ち叡聖なる先帝が、多年安逸に慣れて萎靡頽敗して居つた人心に鞭うつて、國運を新にせられた宏圖

である。而して日露戰役後、人心の又もや緩まんとする虞あるときに於て此の詔書を下し給ひ、愈維新の精神を發揮し、益其の宏圖を振張し、以て大いに國運の發展せんことを望ませられたのである。されば臣民たる我等はよく聖旨のある所を奉戴して、外には世界文明の爲に、內には國利民福の增進の爲に、孜々として努力する所が無くてはならぬ譯である。

既に述べたやうに、此の詔書の出た明治四十一年は、我が國民が戰勝に醉ひて、氣高ぶり、心驕り、浮華輕佻に陷り、奢侈虛飾に流れ、質實の風、勤儉の俗漸く地を拂はんとする頗る危險の時であつて、大いに今日と其の趣を同じうして居つたのである。又斯の如き時には、動もすると狹隘固陋な排他孤立の弊に陷るの虞あるので、まづ第一に諄々として之を戒め給ひ、今日の世界は昔と異なり、五洲一家、天涯比隣の有樣で、列國の人民は和親協同し、緩急相助け、有無相通じ、共に文明の惠澤に與ることを旨とすべく、而して之を爲すには、まづ內國運の發展を計り、庶政の更張をなすを以て第一とするのである。然るに此の事たる、唯之を政府官吏の手にのみ委ぬべきものでない。すべての人民が皆其の心を一にし、各自業を執ること忠實に、產を治むること勤儉に、よく身を愼み、家を齊へ、常に仁義を守りて醇厚の風をなし、奢侈を避け、虛飾を戒め、眞摯質實を旨として日夜其の業務に勵精し、

狹隘固陋
天涯比隣
眞摯

聖訓

決して荒み怠るが如きことある可からざるを敎へられたのであつて、實に我等國民が今日の世界に立つて、其の向ふべき所、其の執るべき所をお示しになつた大聖訓である。我等國民たるものは、其の男たると女たるとを問はず、皆日に之を三唱し、大いに其の爲す所に注意し、以て重大な責任を遂ぐることを期せねばならぬ。

畏くも詔書の御趣意は、實に遠大深長であつて、唯消極的に冗費を省き質素を旨とすべき事を敎へ給へるのみでは無い。積極的の御趣意であることは、明らかに之を窺ひ知ることが出來るのである。「忠實業ニ服シ勤儉産ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ。」の數語は、實に服膺すべき金言で、如何なる倫理學者も、如何なる經濟學者も、最早これに對しては、敢へて一語の加ふべきものが無いであらう。されば、よく戊申詔書の御趣意を奉戴して其の行爲を愼む時には、遺憾なく國民たるの本分を盡すことが出來るのである。

二　戊申詔書の聖旨と現下の狀態　其の二

此の頃手に入つた英國の新聞を見ると、倫敦市では一九一九年七月二十九日、(一)ギルドホールで戰勝祝賀會を開き、皇帝皇后兩陛下の臨御を仰ぎ、市の祝詞を奉つたが、(二)ジョージ五世陛下が之に對してお答へになつた演說の結論は、實に

(一) Gildhall. 町會所。
(二) George V.

終熄す

與國

左の如き意味のものであつた。

戰爭を遂行するが爲に已むを得ざりしを以て、我等は概ね我等の資本に依りて暮し來りたれども、今や戰爭も已に終熄したれば、國家は各人に向つて、我が國の有する富源を最も善く使用する爲に、出來得るだけの節約と、又必要な物貨の生産を成るべく大ならしめん爲の間斷なき奮鬪努力とを切に要求す。

朕は英國國民の古來有せる純粹なる德性は、此の必要の時に於て、決して衰ふる事無きを確信す。而して朕は卿等と共に、戰爭中我等を守り給ひし皇天上帝が、尙永く我等を指導し激勵して、我等及び我等の與國に與へられし

符節を合す

發奮興起

(Wilson.)

此の戰勝を、相應しく用ふる事を得しめ給はん事を祈る。

我が同盟國たる英國の元首が、戰後に於ける國民の心得として宣示せられた所が、我が明治天皇の戊申詔書の聖旨と、恰も符節を合すが如くなるを見て、斯の如き英明なる君を戴く英國人民も、實に多幸であると深く感じたのである。必ずや勤儉質實の性を有し、常識と忍耐力に富む英國人民は、愈、感激して發奮興起することであらうと思ふ。又米國大統領ウィルソン(一)氏も、其の「同胞國民に訴ふる書」及び其の他に於て、勤儉貯蓄を勵行して、專ら生産額の增加に努むることが、是即ち今日國家の危機を安全に經過すべき唯一の道なることを、懇々國民に諭して居る。其の他佛蘭西でも、伊太

利でも、白耳義でも、皆戰後國力の恢復に就いては、何れも皆上下擧つて苦心慘憺せざるは無い。而して國民の心が實に緊張して居るのである。我等は此の際、明治大帝の大詔を奉じ、又世界の大勢に鑑、飽くまで各自の本分を盡し、大いに國家の基礎に培ひ、其の、健全な進歩と發展を圖らねばならぬ。

——商工道德——

基礎に培ふ

三　讀　書

竹越與三郎

書を讀んで得ることがあるといふのは、古の人がかく爲したるが故に、かく爲さゞるべからずといふ譯ではない。我が胸中にあつて、何等の刺戟をも受けなければ、發達しない

(一) Hint.（暗示。，諷示）

(二)「寒夜客來茶當酒。竹爐湯沸火初紅。——。」（杜耒）

思想がある。然るに種々なる書籍を讀行く中に、思はず一點之を刺戟することがある、所謂(一)ヒントを得るといふ。是が即ち讀書の最も尊い所である。例へば「(二)尋常一樣窓前月。纔有梅花乃不同。」といふ詩があるが、何人の家の前にも梅無きにあらず、何人の家の窓にも月無きはない。併しながらこの月と梅とを同時に見て、一首の詩を作るといふことは、僅かに詩人に依つて爲し得るのであるが、之に依つて吾々は多くのヒントを得て、果して然りと思ふ。之と同じく、文學に於ても、世に處する上に於ても、我等は胸中之を知らざるのではない、覺らないのではないが、確然と握ることが出來ず、瞭然と道破せざる場合に、古人が一つ言つた其の言葉に依りて、果

道破す

先進

活社會

(1)Cicero. 羅馬の雄辯家、哲學者、政治家。(西暦紀元前一〇六―同四三)

本能

して然りと言つて膝を打ち、確信を得ることがある。これ即ち讀書の賜である。此の賜たるや、或は書を讀まずとも、先進と交り、其の談話によつて得ることもあるが、それは容易ならぬ事である。先進の今日にあるや、千萬人中の二三十人であつて、之に交る機會は極めて少い。然るに書によれば、古今の先進二三千人と容易く交ることが出來るのであるから、是程己の智能を啓發する所以の良道は無からうと思ふ。然るに之を輕んじて、活社會と交れば讀書はせざるも可なりといふに至つては、頗る迂濶といはなければならぬ。羅馬のシセロ(一)の語に「智者は理によりて動き、中人は經驗によりて動き、愚人は必要に迫られて動き、禽獸は本能によりて動く。」

普及 行きわたること。

大小廣狹云云 大きな書齋と小さな書齋、又廣い書齋と狹い書齋のちがひはあるがの意。

現象 ありさま。

神聖 たつとくて犯すことの出來ないこと。

處を得る あるべき場所にある。

有形云々 形に見えるけもれや形に見えないけがれ、即ち精神上のけがれと書齋内の書物などのけがれ。

といつてゐるが、讀書は即ち人をして理によりて動かしめんとするのである。

―惜春雜話―

自修文

四　書齋

井上哲次郎

教育が一般に普及した結果、此の頃では大小廣狹の差こそあれ、大抵の家には書齋があります。又女子の讀書力も近年著しく增進したので、婦人でもなか〳〵立派な書齋をもつて居られる人が澤山あります。これは誠に喜ばしい現象であります。すべて書齋は出來得べきだけ清淨にし、且之を神聖に保たなければなりません。朝に夕に、或は書き或は讀む事を爲す所でありますから、書冊、筆墨の類の縱横散亂することは免れないのでありますが、出來得べきだけ筆墨、書冊等悉く其の處を得て能く整頓するやうに努め、亂雜を戒むべき事であります。殊に有形無形の不淨

頭腦の反射　其の人の心意の表示といふ意。
精神狀態　こゝろのありさま。
蕪雜　雜草のやうにみだら。
純潔　まじりのないきよらか。即ちほんたうのきよらか。
批評的觀念　よしあしをわけるかんがへ。
必然の結果　必ずさうあるべき結果。
高尚　けだかいこと。
野卑　いやしいこと。
雜書　いろ〳〵のつまらぬ本。

を避けることが必要であります。それといふのは、書齋は主人公に取つては、其の頭腦の次であります。否むしろ書齋は頭腦の反射であります。書齋の狀態如何は、其の主人公の精神狀態の如何を現して居るものであります。書齋を亂雜蕪雜ならしめて一向平氣で居るといふやうなことならば、やはり其の人の精神狀態が、さういふ有樣であるのであります。精神狀態が亂雜複雜に堪へることが出來ず、悉く正確に、悉く純潔ならしめようといふ銳敏な批評的觀念を以て滿たされて居りますれば、其の書齋の狀態も之に相應するやうになつて來るといふのは、必然の結果であります。また其の書齋の中に如何なる書類が陳列してあるか。其の愛讀して居る書類は如何なる性質のものであるか。高尚であるか、野卑であるか。若し極めて野卑な小說及び其の他蕪雜な雜書類であれば、やはり其の主人公の嗜好が極めて野卑であり、蕪雜であることを現して居る。若し又其の書類が哲學、宗教、文學

嗜好　このみ。たしなみ。
秩序　正しく順序のあること。
座右　手近。
古今といはず云々　むかしのでも、又今のでも、西洋のでも東洋のでもまたはどれでもかまはず云々の意。
傑人　すぐれた人。
聖人　智や德がすぐれて、人の手本となるべき人。
世故　世の中のいろいろの事。
達觀　物事の先の先までひろく見通すこと。

など高尚な方面のものでありますれば、其の主人公がさういふ嗜好を有つて居るに相違ありません。それで書齋の中の有樣によつて、主人公の性質が分る譯であります。書齋の有樣は主人公の精神の反射であります。それですから、主人公の頭腦の中即ち精神が純潔でなければならぬやうに、書齋も亦純潔でなければなりません。純潔で且整頓された書齋の中に於てのみ、眞に趣味あり、秩序ある讀書はなし得られるのであります。書齋の中には平生最も愛讀する書類、及び書類講讀に缺くべからざる字書類の如きも、座右に備へて置かなければならぬのでありますが、又古今といはず東西といはず、其の最も敬慕して居る偉人傑士、もしくは聖人の肖像又は筆蹟等を壁間に掛けて、朝に夕に親しく之に接するといふことも、なか〳〵趣味あるものであります。まだ年の若いうちは、書畫に就いて、さ程の趣味を生ずるものではありませんが、漸く經驗を積み、世故に長けて、人事を達觀した後、

象どる　形としてあらはす。　自我　自分。

古人の書畫を壁間に掛けて之を眺める時は、一種謂ふべからざる趣味を生ずるものであります。若し又廣大な書齋であります ればゞ、世界の地圖若しくは日本の地圖等を掛けるのも甚だ有益であります。かくの如く多く書籍を集め、又書籍を清潔にし、古人の肖像筆蹟等を掲げて裝飾した以上は、愈〻以て其の主人公の頭腦を象どる譯であります。そこに至りますと、書齋は愈〻貴重のものとなつて來まして、自我と書齋とは、決して離るべからざる關係を生じて來るのであります。

五　博雅の朝臣

今は昔、源博雅朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の兵部卿克明親王と申す人の子なり。萬の事に勝れてありける中にも、管絃の道になんいみじかりける。琵琶をも微妙に彈き

えならず　雜色　あながちに好む

けり。笛をもえならず吹きけり。此の人村上の御時に四位の殿上人にてありけり。其の時に逢坂の關に一人の盲、庵を造りて住みけり。名をば蟬丸とぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の御宮の雜色にてなんありける。其の宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年頃琵琶を彈き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶をなん微妙に彈く。

然る間、此の博雅此の道をあながちに好みて求めけるに、彼の逢坂の關の盲、琵琶の上手なる由を聞きて、これを極めて聞かまほしく思ひけれども、盲の住家ことやうなれば行かずして、人を以て内々に蟬丸に言はせけるやう、「など思ひ

かけぬ處には住むぞ。京に來ても住めかし。」と。盲之を聞きて、其の答をばせずして曰く、

よの中はとてもかくても過してん
宮もわら屋もはてしなければ

と。使歸りて此の由を語りければ、博雅これを聞きて、いよいよ其のみやびの心に感じ、思ふやう、「われ音樂の道を好むによりて、此の盲にあはんと思ふ心深し。されどこの盲の命いつまであらんもはかり難し。わが命も知り難し。琵琶に流泉、啄木といふ曲あり。これは世に絶えぬべきことなり。唯此の盲のみこそ之を知りたるなれ。かまへてこれが彈くを聞かん。」と思ひて、夜彼の逢坂の關に行きにけり。されども蟬丸其

かまへて

の曲を彈くこと無かりければ、其の後三年の間、夜々逢坂の盲が庵の邊に行きて、其の曲を今や彈く今や彈くと密かに立聞きけれども、更に彈かざりけるに、三年といふ八月の十五日の夜、月少しうはぐもりて風少し打吹きたりけるに、博雅「あはれ、今宵は興あり。逢坂の盲今夜こそ流泉、啄木は彈くらめ。」と思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲琵琶をかき鳴して、物哀れに思へる氣色なり。博雅之を極めて嬉しく思ひて聞く程に、盲獨り心をやりて詠じて曰く、

逢坂の關のあらしのはげしきに
しひてぞ居たる世をすごすとて

とて琵琶を鳴したるに、博雅之を聞きて、涙をながしてあは

うはぐもる
心をやる

れと思ふこと限り無し。盲獨言に曰く、「あはれ興ある夜かな。若し我にあらぬすき者や世にあらん。今夜心えたらん人の來よかし。物語せん。」といふを、博雅聞きて聲を出して、「王城に在る博雅といふ者こそ之に來たれ。」といひければ、盲の曰く、「かく申すは誰にかおはする。」と。博雅の曰く、「我はしか〳〵の人なり。あながちに此の道を好むによりて、此の三年此の庵のあたりに來つるに、幸に今宵汝に會ふ。」と。盲之を聞きて喜ぶ。其の時に博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語などして、博雅「流泉、啄木の手を聽かん。」といふ。盲「故宮はかくなん彈き給ひし。」とて、件の手を博雅に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、たゞ口傳をもて之を習ひて、返す

かたみに

返す喜びて、曉に歸りにけり。

之を思ふに、もろ〳〵の道は只かくの如く好むべきなり。それに近代は實に然らず。されば末代には諸道に達者は少きなり。蟬丸いやしき者なりといへども、年ごろ宮の彈き給へる琵琶を聽きて、極めたる上手にてありけるなり。それが盲になりにければ、逢坂には居たるなりけり。それより後、盲の琵琶は世に始れるなりとなん語り傳へたるとや。

——今昔物語による——

六　禁庭の野分（昭憲皇太后御作）

朝露のひるまはさしもなかりし空の、俄にかき曇り、夕星

朝露のひるまはさしもなかりし空

の光も見えず。とかくする程に雨いたく降出でて、ほとり近く語りあふ人の聲だに、聞きわかぬまでになりぬ。閨に入る頃は、なほ雨の音のみ聞えしを、夜深くなるまゝに、いかづちさへ鳴りはたゝきて、夢うつゝとも思ひ定めぬに、ひまなく稲妻のきらめきわたる、いとけうとし。曉がたには雨はをやみぬれど、風烈しう吹出でて、宮の内もゆるぐばかりなるに、いとゞ目もあはず。

鳴りはたゝく

けうとし

上には民のためとて、畏くも遠(一)きさかひにいでましたる程なれば、いかなる行宮にまし〳〵て、此の風の音に御心をなやまし給ふらん。皇(二)太后の宮には、いかにおはしますにか。幼き宮たちも驚きやし給ふらんと思ひつゞくる程に、夜も

(一)明治四十年明治天皇東北御巡幸。

(二)英照皇太后

ふけぬれど、いまだ風靜まらで、いづこもおろしこめたる、いとものむづかし。

ものむづかし

軒近き栗の枝の、結べる實ながら吹折らるゝ音いと烈しく、御階のもとのばせをも、筒井の傍なる柳も、皆をれふしぬ。今をさかりなりし眞萩も、名殘なく散亂れたる、

名殘なく

宮城吹上御苑

千町田

しなとの神
吹かなん

おちゐる

いと寂しく見ゆ。宮のうちだにかく荒れぬるを、ましてあやしげなる賤が家居などは、倒れぬるも多からんなど、思ひやればすゞろに悲し。おしなべて實のりよしと聞きつる千町田の稻も、ふきそこなはれつらんやなど、心にかゝりて、

國のためしなとの神も心して
いなばの上はよきて吹かなん

なほとやかくやと胸をいたむる程に、いつとなく靜まりて、日影まばゆく雲間にさしいでぬるに、おのづから人の心もおちゐにけり。

七　蘇武

坪内逍遙

節旄

(一)支那北方に威を振ひし夷族。土耳古種族に屬し常に漢の大患をなせり。

夷の物

風颯々の秋ふけて、
節旄かろく、命おもし。
千里萬里の路越えて、
深く匈奴(一)の國に入る。
野邊の草木や、鳥の聲、
聞く物の音も、見る色も、
いづれか夷の物ならぬ。
思へば遠く來つるかな。
流れゆく水音たてゝ、
胸にうれひの波たかし。
故郷母あり、かり鳴きて、

老の寢覺

老の寢覺やいかならん。
よしや幾夜の草まくら、
旅寢の空に果てぬとも、
國家のために盡すべし。
君命おもく、身はかろし。
かうと覺悟は定まりぬ。
使命つぶさに傳へつゝ、
匈奴の王に面接し、
蘇武は國書を呈しけり。
固より非道の王なれば、
國書の旨意は聽かざれど、

挺身

幽閉す

挺身敵地に使せし
蘇武が勇氣を惜しみつゝ、
或時蘇武を召しよせて、
「降り仕へよ。しかあらば、
おもく汝をもちひん。」と、
とき諭せども聽かざれば、
國王大いにいかりをなし、
蘇武をとらへて荒山の
岩窖(いはぐら)の中に幽閉し、
食を與へず、くるしめぬ。
頃しも北風雪を吹き、

料

寒さ膚をつんざけり。
飢うれば氈毛を雪に和し、
いのちを繋ぐ料となす。
日數經れども死なざれば、

無念

夷等怪しみ、かつ怖れ、
此度は蘇武を野に移し、
羊のむれをば守らせて、
「雄羊孕むことあらば、
放免せん。」とあざけりぬ。
覺悟はしても無念さに、
眠られぬ夜もいく度か。

秋ももなか

ひと夜雲なく月すみて、
秋ももなかの空のいろ、
せめてはかくてある事をと、
雁に託せし筆の跡。
かくて春去り、夏きたり、
また秋の風、冬の霜、
落葉々々のかさなりて、
十有九年ゆめの間や。
老いて屈せぬ忠節を、
天助けてか、不思議にも、
雁の使のかひありて、

たのしき便ぞ聞えける。

國と國との和議成りて、

蘇武は赦され歸りしに、

立出でし時の黑髮は、

いつしか雪とぞなれりける。

——國語讀本——

八　覺悟

安積信

覺悟ある人は事變に臨みて驚かず。覺悟なき人は狼狽して度を失ふなり。一點の火にても思ひよらざる時手に當れば、驚きて色を變ず。大の灸にても覺悟して炷すれば、驚くことなし。古人の書を讀み、人物の得失を辨じ、治亂興廢の跡を

狼狽して度を失ふ

炷

觀るは皆我が覺悟すべき工夫の爲なり。道に古今無く、理に內外なし。事跡は同じからずといふとも、道理は一に歸するなり。

今川義元[一]、戰場にて何某を召し、斥候に遣はしき。先陣の戰既に始りし所なれば、逃れ難くて鎗を交へ、首一級を得て歸りぬ。義元大いに怒り、「敵勢を覘ひ速に歸るべしと命ぜしに、おのが功を貪りて、使命を餘所にす。忠義の心無し。軍法に行ふべし。」といふ。かの士萎れたる體にて、側の人に向ひ、低聲にて、

刈萱に身にしむ色は無けれども
　みすてがたきは露のしたをれ

斥候

(一)駿河の國守。永祿二年(一五五九)尾張に攻入り、織田信長に襲はれて戰死す。年四十二。

沈吟す

急猝の間

(一)名は宗茂。寛永十九年(一三三〇二)歿。

冥加

顛動す

と、家隆の歌を唱へしかば、義元益〻怒り、「何と言ふ。」とありしに、侍臣其の事を告げしかば、しばらく沈吟して忽ち怒色を霽し、「屈かざる事なれども、急猝の間に家隆の歌を思ひ出しゝこと名譽なり。」とて、罪を赦されたり。

此の人の急猝の間に古歌を引き志を述べしは、覺悟ある所爲なり。立花龍虎齋常に息女に教へ給ひしは、「女なりとも士の妻たる者が、事ある座に居合せたる時、取亂したる體あらんは見苦しきものなり。さやうの時は、かゝる座に居合せたること、誠に冥加の事かなとまづ思ふべし。さて其の後に如何樣とも相應に取計らふべし。如何なる事にも顛動するゆゑ、取亂したる體もあるなり。」と教へられきとぞ。意味深き名言なり。

(一)平清盛。
(二)攝津にあり。武庫郡所名。
(三)今の御影附近が如し。邊の濱なり。魚崎より深江指せ
(四)武庫郡布引山
(五)在原業平。右近衛中將たり。五中將といふ。
(六)「はる、夜の星か、河邊の螢か、わが住むかた方の火か、蛍か。」(新古今集)
(七)攝津國猪名川
(八)攝津國河口邊郡稲野の舊名。今大字に昆陽あり。
(九)見渡せば山もと霞む水無川夕は秋瀬となに思ひけん。(增鏡、後鳥羽、天皇)
(一〇)攝津國三島郡島本村。山

九　舊都の月

後德大寺左大將實定は、舊都の月を戀ひわびて、入道に暇を乞ひ、都へ上り給ひけり。元より心すき給へる人にて、憂世の旅の思出に、名所々々を問ひ見てぞ上られける。千代に變らぬ翠は雀の松原、みかげの松。雲井に曝す布引は、我が朝第二の瀧とかや。業平中將かの瀧に、星か河邊の螢かと、浦路遙かにながめけん、何所なるらんおぼつかなる。なの湊の曙に、霧たちこむる昆陽の松、かならず春にはあらねども、山本霞む水無瀬川男山に澄む月は、石清水にや宿るらん。秋の山の

紅葉の色、稻葉を渡る風の音、御身にしみてぞ覺しける。

さても都に入り給ひ、彼方此方を見給へば、空しき跡のみ多くして、たま〳〵殘る門の内、行きかふ人もなければ、淺茅が原、蓬が杣と荒果てゝ、鳥の臥所となりにけり。八月半ばのことなれば、まだ宵ながら出づる月、主なき宿に獨り住む。折知り顔に鳴く雁の、音さへつらくぞ聞し召し、大將はいとゞ哀れに堪へずして、大宮の御所に參り、かねて心知れる某女房して、かくと申させ給ひければ、宮(一)斜ならず御悦ありて、「こなたへ。」と仰せけり。大將南庭をまはりて、彼方此方を見給ふにつけても、昔は百敷の大宮人にかしづかれて、明し暮し給ひしに、今は幽かなる御所の御有樣、軒に蔦茂り、庭に千草生

崎驛の南を流るゝ小川。

(二)山城國綴喜郡。山崎驛と淀川を挾んで相對す。

蓬が杣

鳥の臥所

(一)近衛天皇の皇后。

ひかはす。こと問ふ人もなき宿に、荻吹く風もさわがしく、昔を戀ふる涙とや、露ぞ袂をぬらしける。時しあればとおぼしくて、蟲の怨もたえ〳〵に、草のとざしも枯れにけり。大將哀れに心の澄みければ、庭上に立ちながら古詩を詠じ、其より御前に參り給ひけり。八月十八日の事なり。宮は居待の月を待佗びて、御簾半ば捲上げて、御琵琶を遊ばして渡らせ給ひけるが、山立出づる月影を、猶や遲しと思しけん、御琵琶を擱かせ給ひつゝ、御心を澄ませ給ひけり。大將參り給ひければ、大宮は撥にて「それへ。」と仰せけり。其の御有樣、あたりを拂ひて見え給ふ。互に昔今の御物語あり。大將は福原の都の住み憂き事語り申して泣かれければ、宮は平の京の荒行く事を

居待の月

あたりを拂ふ

仰せ出して、共に御涙に咽ばせ給ひけり。かくて夜もいたく更けければ、后宮は御琵琶を搔寄せさせ給ひて、秋風樂をひかせ給ふ。侍從は琴を彈きけり。大將は腰より笛を取出し、遙かにこれを吹き給ふ。その後故郷の荒行く悲しさを、今樣に作りて歌ひ給ふ。

古きみやこを來て見れば、
淺茅が原とぞ成りにける。
月のひかりはくまなくて、
あき風のみぞ身にはしむ。

と三遍歌ひ給ひければ、宮を始めまゐらせて、御所中に候ひ給ひける女房達、折から哀れに覺えて、皆袂をぞ絞りける。

あかるなき
かの命のほど

一〇　蟲の聲

—源平盛衰記—

樋口一葉

垣根の朝顏やう〳〵小さく咲きて、昨日今日葉がくれに一花見ゆるもあはれなるに、松蟲、鈴蟲鳴き弱りて、朝日まちとりて竈馬（こほろぎ）のはかなげに聲する小溝の端、壁の中など、あるとなきかの命のほど、老いたる人、病める人など聞きたらば、さこそは身にたぐへられて物悲しからめ。

まだ初霜はおくまじきを、今年は蟲の齡いと短くて、早くも聲のかれ〳〵に成りにしかな。轡蟲は喧しき聲も形も、いかに丈夫めかしきを、いつしか時の間に衰へ行くらん。人にも

振りいでて鳴く

さるたぐひは有りけりとをかし。鈴蟲は振りいでて鳴く聲の美しければ、物嫉せられて齡の短きなめりとうなづかる。松蟲も同じことなれど、名と實と伴なはねば、怪しまるゝぞかし。常磐の松を名に呼べば、千歳ならずとも、一年の末までだにあるべきを、萩の花散りこぼるゝ、やがて聲せず成行く。さる命短きものなれば、暫時も似よとや、此の名を負はせけん。親ぞ知らまほしき。

いを睡る

二とせ此の蟲を籠に飼ひて、露にも當てじといたはりたりけるが、其の頃病に臥したりつる兄の、夜な〳〵鳴く聲の耳につきて、もの佗しく、あの聲なくばいを安く睡らるべしなど言へれば、いそぎ取下して庭草の茂みに放ちぬ。其の夜

さながらの聲

鳴くやと聽きたれど、さらに聲のきこえねば、俄におく露の身に寒くて、え鳴かぬにかとぞ憐み合へりし。其の年暮れて、兄は空しき數に入りぬ。

又の年の秋、此の頃ぞなど、過ぎにし事思ひ出づる折しも、夜更けて、近き垣根の中に、さながらの聲聞えぬ。よもあらじと思へど、たゞ其の者のやうに懷かしく、戀しきにも、珍しきにも、涙のみこぼれて、此の蟲のやうに、よし異人なりとも、聲も貌も同じからん人の、唯今こゝに立出で來たらば如何ならん。我は其の袖をつと促へて放つまじく、母は嬉しさに物はいはれで、涙止めあへ給はずおはすらん。父は如何さまに惑ひ給ふらんなど、怪しき事をのみなん思ひ寄りぬる。

かくて二夜ばかり鳴きつ。其の後はいづち行きけん、ほのかにも聲の聞えずなりぬ。今も松蟲の聲聞けば、やがて其の折思ひ出でられて物悲しきに、籠に飼ふ事は更にも思ひ寄らず。おのづから野邊に鳴き弱りゆくだに、唯過ぎにし秋のわかれのやうに思はるゝぞかし。

—明治百家文選—

自修文

一一　修身要領

福澤諭吉(一)

心身の獨立を全うし、自ら其の身を尊重して、人たる品位を辱めざるもの、之を獨立自尊の人といふ。

自ら勞して自ら食ふは、人生獨立の本源なり。獨立自尊の人は、自勞自活の人たらざるべからず。

身體を大切にし健康を保つは、人間生々の道に缺くべからざ

(一)教育家。豐前中津の人。慶應義塾を創立す。明治三十四年歿。年六十八。

心身　こゝろとからだ。心の獨立とは、心をけだかくもつて、人に卑しめられないこと。

自勞自活　みづから働いて生活すること。

生々　ものゝ出來て行くこと。

要務　最も大切なつとめ。

進退方向　世の中に處して行く方法。

思慮判斷　かんがへてきめること。

人倫　人たるみち。

眞純　純粹でまじりのないこと。

るの要務なり。常に心身を快活にして、苟且にも健康を害するの不養生を戒むべし。

獨立自尊の人は、一身の進退方向を他に依賴せずして、自ら思慮判斷するの智力を具へざるべからず。

福澤諭吉

結婚は人生の重大事なれば、配偶の選擇は最も愼重ならざるべからず。一夫一婦、終身同室相敬愛して、互に獨立自尊を犯さゞるは人倫の始なり。

一夫一婦の間に生るゝ子女は、其の父母の他に父母なし。親子の愛は眞純の親愛にして、之を傷つけざるは一家幸福の基なり。

訓誨をしへ。
孜々おこたらず、つとめるさま。
素養したぢ。
期す前以てきめておいて、必ずさうならんことを願ふ。
社會の組織云々世の中をくみ立てる。
共存ともくに存して行くこと。
自他自分と他人。
大小輕重云云仕事が大きからうが小さからうが、又ちよつとしたものであらうが重要なものであらうが。

子女も亦獨立自尊の人なれども、其の幼時に在りては、父母これが教養の責に任ぜざるべからず。子女たるものは父母の訓誨に從つて孜々勉勵、成長の後、獨立自尊の男女として世に立つの素養を成すべきものなり。

獨立自尊の人たるを期するには、男女共に成人の後にも、自ら學問を勉め、知識を開發し、德性を修養するの心掛なかるべからず。

一家より數家、次第に相集りて社會の組織を成す。健全なる社會の基は、一人一家の獨立自尊に在りと知るべし、

社會共存の道は、人々自ら權利を護り、幸福を求むると同時に、他人の權利幸福を尊重して、苟も之を犯すことなく、以て自他の獨立自尊を傷つけざるに在り。

人は自ら從事する所の業務に忠實ならざるべからず。其の大小輕重に論なく、苟も責任を怠るものは、獨立自尊の人にあらざるなり。

要具だいじなだうぐ。
過不及餘つたり足らなかつたりすること。
忽にすそまつにする。
博愛ひろくものを愛すること。

禮儀作法は敬愛の意を表する人間交際上の要具なれば、苟且にも之を忽にすべからず。只其の過不及なきを要するのみ。

己を愛するの情を擴めて他人に及し、其の疾苦を輕減し、其の福利を增進するに勉むるは博愛の行爲にして、人間の美德なり。

博愛の情は同類の人間に對するに止るべからず。禽獸を虐待し、又は無益の殺生を爲すが如き、人の戒むべき所なり。

文藝の嗜は人の品位を高くし、精神を娛ましめ、これを大にすれば社會の平和を助け、人生の幸福を增すものなれば、亦これ人間の要務の一なりと知るべし。

國あれば必ず政府あり。政府は政治を行ひ、軍備を設け、一國の男女を保護して、其の身體、生命、財產、名譽、自由を安全ならしむるを任務とす。是を以て國民は軍事に服し、國費を負擔するの義務あり。

日本國民は男女を問はず、國の獨立自尊を維持するが爲に、生命財産を賭して、敵國と戰ふの義務あるを忘るべからず。

國法を遵奉するは國民たるものゝ義務なり。單に之を遵奉するに止らず、進んで其の執行を幇助し、社會の秩序安寧を維持するの義務あるものとす。

賭す　かける。

幇助　たすけること。

一二　母の形見

堀秀成

世に曾我兄弟といふ十郎祐成、五郎時致は、父の仇工藤を討たんと、年頃心を苦しめ、身をやつして、時を待ち居たりき。をりしも、源頼朝の富士野の狩せんとて、國々の大小名悉く鎌倉に參集すと聞きて、兄弟は曾我の里にある母の許に參りぬ。弟五郎は母の意にて出家にせんとて箱根に登せ置かれしが、かくては仇を討つことかなはねば、密かに山を遁れ下りたるを、母の意にたがふとて勘當の身となれりければ、五郎をば障子の蔭に隠し置き、十郎一人母にまみえて曰く、「ほのかに聞かせ給ふらん、此の頃鎌倉殿富士野の狩に出立たせ給ふとて、國々の武士共われ劣らじと、馬物具、美を盡して狩場に參る由。物の數ならぬ某なれども、此の世の思出に、此の前代未聞の狩場に立交りなんと思ひ立ち侍り。されば暫時の御暇乞に參りたり。」といふ。母聞きて、「そは忌はしき事をいふものかな。父君はいづれの時に失せさせ給ふと思ふぞ。赤澤山のかりくらの歸るさに、人の箭先にかゝりて露と消え給ひしにあらずや。狩場と聞くだにも心憂き事なるを。」

(一)後鳥羽天皇建久四年(一八五三)五月。

身をやつす

(一)源頼朝。

馬物具

前代未聞

忌はし

(二)伊豆國田方郡遠笠山の東麓。矢筈山と對す。

かりくら

勘當

唐櫃

はふり落つ

(一)曾我太郎祐信の事。

とて、涙ぐみて見ゆるを、十郎おしかへして、「いかに御女性におはすればとて、詮なき事を宣ふものかな。必ず心遣し給ふな。それにつけて、富士おろしの朝風は、夏も身にしむものと承るを、御下着一つ貸し給へ。」といへば、母唐櫃より小袖一つ取出して與へぬ。十郎押戴き、今生の暇乞とは後にてこそ知らせ給はめと、心のうちに悲しく、小袖の上にはふり落つる涙を、母に知らせじと押隱し、なほ母の傍に居寄りて、「他に着せたき者の候に、今一つ賜はりたし。」といふを聞きて、母色を變へ、「其の着せたき者とは誰が事ぞ。此の母も今は曾(一)我殿に養はれて、小袖一つも思ふに任せぬ身なるを。」といへば、十郎、「其の着せたき者はこゝに。」といひつゝ、隔の障子押開けば、五

(一)北條時政。

烏帽子子

千に一つ

(二)東山天皇元祿十五年十二月十四日の夜。

胴着

郎面目なきさまにてうつむき居たり。母これを見て、「彼は我が子にあらず。」とて立たんとする裾をとらへて、「情なくも宣ふものかな。彼も今は北條殿の烏帽子子(エボシノコ)になり、五郎時致と名乘り申すを、あはれよき男になりたりとも宣はで、我が子にあらずとは、聞えぬ御詞なるぞかし。弓矢取る身の門出の習ひ、千に一つ此の世の御別とならば、後にこそ悔い給はめ。」といひければ、又小袖一つ五郎にも與へたる由、其の頃の史どもに見えたり。これ兄弟、母の小袖を打着て狩場に赴き、母の形見を我が身に添へて、潔く討死せんとの意なり。又元(二)祿の昔、大石主税も母の胴着を下に着込みて吉良家に討入りしが、其の夜雪の爲に池に落ちて、それを濡しけり。あくる日

の朝、泉岳寺にて義士の人々火にあたる時、主税は其の身につけし形見の衣の濡れたるを取出して乾かし居たるを、父の良雄も見て涙落しゝ由なるが、彼は建久の昔、此は元祿の時。彼は孝子、此は忠臣。其の時代及び忠と孝との差こそあれ、親の形見を身に添へて志を遂げたる、一對の美談といふべくこそ。

——琴舍文集——

一三　みやび

延喜時代の歌人凡河内躬恒は、

てる月を弓張としもいふことは
山邊をさしていればなりけり

時にとつての面目

の歌に、天皇の感賞を得た。武人で歌人であつた平忠盛の

ありあけの月も明石の浦風に
波ばかりこそよるとみえしか

同じく武士で歌の名手と稱へられた源三位頼政の

郭公名をも雲井にあぐるかな
ゆみ張月の射るにまかせて

いづれも、時にとつての面目を、雲井の空に施したのである。

一條天皇の御世に中將實方卿[一]が一時の感情に激して、藤原行成卿の冠を打落したが、行成は少しも騒がず、笄を取出して冠を直した。天皇は御簾の隙から之を御覽になつて、「行成は心優なるものである。實方は陸奥の歌枕見て參れ。」とて

(一)近衛中將藤原實方。歌人。長德四年(一〇九八)歿。
(二)書家又歌人。萬壽四年(一〇六七)歿。年五十六。

寛弘の御德

（一）聖武、孝謙両朝頃の人。天平寶字元年（一四一七）歿。年七十四。

陸奥へ遣はされたとある。歌枕見て參れとの仰、何といふ優しいお詞であらう。高倉天皇の御代に、衛士が御苑の紅葉を焚いて酒を酌みかはした。天皇は「林間煖酒焚紅葉」と白樂天の句を誦して、「風流な者よ。」と仰せられた。何といふ寛弘の御德であらう。天平十八年正月雪の降積つた朝、橘諸兄以下が上皇の御宮に參つた時、おの〳〵歌を作れとの仰。おもひおもひの作があつた

林間煖酒焚紅葉

中に、橘左大臣諸兄は

降る雪のしら髪までに大君に
つかへ奉れば貴くもあるか

と歌つた。白髪の老臣が、君恩を喜んだ有樣が目に見えるやうで、君臣和樂の親みが思ひやられる。

南殿の花の宴を始として、雪のあした、月の夕、天皇が群臣を召して、詩歌、管絃の風流を盡させられたことは中古時代の常であつた。九月十三夜の後の月を賞する事は、宇多天皇の御世から始つたとか。まして南殿の花の宴、折々の舞樂の花やかさ、きら〳〵かさは想像するに餘りある。後醍醐天皇が吉野山に雲井櫻を御覽じて、

こゝにても雲井の櫻咲きにけり
たゞかりそめの宿とおもふに

と仰せられた御雅懷は、聞く我等には悲憤の涙も添ふ心地がする。歴代の天皇が風雅韻致に富ませられ、殊に和歌に堪能でいらせられたことは、世界各國の帝室に例の無いことであらう。

和歌は我が國固有の文學で、上下幾千載の歴代の文學を縱に貫き、横に貫いて居るものである。漢文を主とし、漢詩を作る事の大いに行はれた時代でも、和歌は固有の文學として常に行はれた。延喜時代に始めて古今集の勅撰があつてから、續いて後撰、拾遺と鎌倉の始頃までには八代勅撰集が、

勅撰集

院宣或は勅命によつて出來上つた。承久の役の三上皇、後鳥羽、順德、土御門は殊にこの道に堪能でいらせられた。敷島の道といふ名稱もこの頃から起つた。和歌を日本固有の道と稱へたのである。勅撰集の撰集があつた事は、朝廷と和歌に少からぬ關係を有せしめた。一首でも勅撰集に採られる事を非常な名譽と感じた。もと〳〵古來の忠君心から出たのではあるが、撰集に入つて、歌名を後世に傳へる事は、武人が戰場の功名よりも一層な名譽であつた。平家の都落の際、平忠度が途中から引返して、夜千載集の撰者であつた俊成卿の門を叩いて其の歌集を託し、死後一首にても入選の榮を得しめ給へと賴んだのは有名な話である。俊成がその心を

敷島の道

列聖

酌んで、讀人知らずとして千載集に收めたのは、

さゝ浪や志賀の都はあれにしを
むかしながらの山ざくらかな

の歌であつた。勅撰集は二十一代集までを數へて、其の後は絶えたが、天皇をはじめ奉り、攝關以下公家の人々は代々皆歌の嗜があつた。皇室と和歌、實に離るべからざる聯想がある。萬世一系の皇統、太古以來の文學、列聖の御歌、和歌に伴なふ歴代の佳話、これ等は皆我が國の古代を思念せしめるものである。百人一首の歌ガルタが、永く弘く國民の間に喜ばれるのも、こゝにその意義がある。

一たび古代の語に綴られた三十一文字の音響に觸れゝ

ば、思は遠く平安時代の昔に遡る。德川時代に入つては、歌學の研究は進んで國學となつて、大いに忠君愛國の思想が皷吹せられることとなつた。幕末勤王の士は皆和歌を口ずさんで、その忠君愛國心を吐露した。

かくして、皇室は道德の本源であらせられたばかりで無く、又風流文雅の中心であらせられたのである。文藝ばかりでは無く、音樂、禮儀一切の有職の淵源であつたのである。兵馬の權が武門に移つて後も、一切の名譽、光榮の中心は朝家にあつたのである。

武家時代に生れた人々も、皆みやびの心をもつて朝家を仰ぎ、古代に憧憬したのである。みやびは「宮び」で、宮中のふり

といふ意義である。

一四　秋冬の歌

秋來ぬと目にはさやかに見えねども
　かぜの音にぞおどろかれぬる　藤原敏行(一)

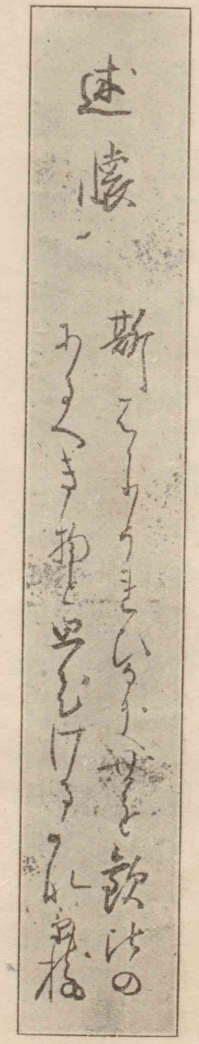
みどりなる一つ草とぞ春は見し
　秋はいろ〳〵の花にぞありける　讀人知らず

桐の葉もふみわけ難くなりにけり
　かならず人を待つとなけれど　式子內親王(二)

あさぼらけ有明の月と見るまでに
　よし野の里にふれるしら雪　阪上是則(三)

(一)從四位上。歌及び書を能くす。延喜七年(一五六七)歿。
(二)本書三卷二〇課を見よ。
(三)延喜、延長頃の人。

山深みおちて積れるもみぢ葉の
　かわける上に時雨ふるなり　大江嘉言(一)



景樹筆蹟
(萩野由之氏藏)

照る月の影のちり來る心地して
　よる行く袖にたまる雪かな　香川景樹(二)

述懷
かくばかりうれひなきよの世をべきものとおもひけるかな　景樹

(一)對馬守。歿年不詳。
(二)有名なる歌人。京都に住す。天保十四年(一八四三)歿。年七十六。

一五　實體實相

松浦一

すべて物の實體實相は、全部を解放した處にあり、區別を超越した處にありまして、それから生じて來る實體實相の

威嚴は、想像するに難いことではありませぬが、其の例證に私が非常に面白く感じた和歌の話を擧げて見ませう。

長野義言(一)の「歌の大武根」に、或尼が盜賊に縛られながら和歌を詠んだところが、盜賊はその和歌にひどく感動してしまつて、奪つた物までも返して逃げてしまつたといふ奧ゆかしい話が書いてあります。

近き頃彦根に、慈門といへる尼、若くて世を遁れ、里根といふかたはしなる所に庵を占めて住みけるに、一夜盜人ども忍び入りて尼を搦めおき、物など奪はんとせしに、尼搦められながら詠みける、

よし垣ももとは難波のあしなれば

(一)伊勢の歌人。彦根侯井伊直弼に擢用せらる。文久二年(一八六二)歿。年四十八。

こすもことわりよるのしら波

此の歌を聞きて、盜人ども尼をもゆるし、物みな返して出でいにけり。意は、世を遁れ來て棲める庵のよし垣も、元は難波の浦に生ひたる蘆と同じ類のものなれば、今宵しも白波の越えて入りしは理なり。かゝれば身は遁れても、世を隔つる垣はなきぞと感じ諦めたるを情深く哀れに言ひなしたるにて、是も詞には盜人すなといへるならねども、同じ世にふる人なれば、いかでか感じ實にもと思ふ心なからん。こゝの白波は盜人の事なり。

日本文學に歌の德が靈妙なる力を現すといふ話が澤山あり、又これを仕組んだ作品が澤山あるのは、日本人が昔か

眞髓感得

ら文學に一種の神性を感じ、其處に靈的（セイてき）の意味を理解することが一般に出來て居たといふ事を示すものであります。から、此の點だけでも、文學的に日本人は世界に誇ることが出來るのであります。それは文學といつても歌に留まるではないか、といふ人があるかも知れませぬが、詩歌は文學の眞髓であります。歌についてこれだけの感得が自由に出來れば十分であります。此の點については、明治に始つた新日本の日本人は、却つて舊日本の日本人よりも、文學的に墮落して居りはしないかと思はれます。理窟をいふことを知らずして、率直に物の精神に觸るゝことの出來たのが舊日本の特色であります。理窟をいふことは巧になつたけれども、

朴直

俗緣に繫がる

心の垣を撤す

朴直と親切と、隨つて物の精神を眞に感じ、全心を傾注して書物を尊敬し崇拜することが出來なくなつたのが、新日本の遜色であります。

さて此の歌の貴い處は、限界が固りついて居る浮世の垣を、其の儘に僧庵の周圍に取周らしたものであるから、俗緣を斷つたと思つて居た身でも、やはり俗緣に繫がれて居た。俗緣に繫がれて居る者が、俗緣で盜賊にはいられても、致方ない次第であると悟つた其の一つの悟にあります。此の悟にはいつてしまへば、垣を結んだのが己に誤である。尼は縛られても盜人を怨まない。又盜人に盜みをするなと訓戒もしない。其の怨まず、戒めず、自己の心の垣を撤して區別もな

く、區劃もなく、一切を解放して分つことも出來ず、集むることも出來ぬ自分といふものゝ實體を抛げだした處に、賊を威壓し、吾々を威壓する力が生じて來たのであります。かういふ例は、唯歌の德といふばかりではありませぬから、高德の上人の間には、これに類した話は澤山にありませうが、要するに、一切のものが、此の實體實相と威嚴との境涯まで行かなければ、未熟でなければ虛僞であると思ふのであります。

—文學の本質—

一六　本多重次

新井白石

去にし天正十三年三月に、(一)德川殿御背中に疔といふもの

去にし(一)德川家康。

疔

宗徒

祈らぬ神佛もなく立てぬ願もなし

手を束ぬ

出で來て、既に危く見えさせ給ひしかば、內外の醫療術を盡しけれども其の驗なく、唯弱りに弱らせ給ひ、自らもこれまでと思し召しけるにや、宗徒の御家人等召集めて、御後の事ども仰せ置かる。人々の周章いふに及ばず、平民、百姓などに至るまで、其の程々に隨ひて、祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。

本多重次御枕に取りつきて、泣く〳〵申しけるは、「殿も定めて覺えさせ給ひなん。重次が昔此の病を受けしに、立所にしるし得し良醫の候。彼を召して見せ試み給ふべし。」と申す。「諸醫既に手を束ね、家康亦死を決す。此の上醫療其の詮なし。且は命を惜しむに似たり。」とて用ひ給はず。重次大いに怒つ

腫物

あつたらしき命

て、「かほどの大事の腫物、かろ〴〵しく思し召し侮つて、事急なるに臨めばこそ、諸醫も術盡きぬれ。それにまた良醫して治せしめ參らせんとするを用ひ給はで失せ給はん事、御心がらとはいひながら、あつたらしき命かな。諸醫術盡きぬと申す上は、彼等いかでか治し參らすべき。年老いたる重次が、御跡に下つて御供叶ふべからず。さらば御先へ參らん。」とて、御前を罷り立つ。

徳川殿大いに驚かせ給ひ、「あれ止めよ。」と仰せければ、近く侍ふ人々走り出で引止め、「仰せらるべき旨あらせられ候。」といふ。重次大いに聲を怒らして、「最後の暇乞ひて罷り申す者を、見苦しい殿原の止めやうや。」と罵つて出でんとす。されば

えこそ止めねさも候

候。其の人を止めよとの御使が、えこそ止めねとは、おとなしくも候はぬ本多殿。」といはれて、「げにさも候。」とて、御前にまゐる。

徳川殿、「汝は物に狂ひてかくは言ふか。家康未だ死しはてぬに、たとひ家康が命終るとも、汝等が世にあらんを頼みにこそ死すべけれ。又汝等も如何にもして、一日も世に殘りて、若き者ども捉して、我が家の絶えざらん樣を計らんとは思はずして、詮なき死の供せんとする事やある。」と仰せければ、「いや〳〵、それは人によつての事に候。重次も今少し年だに若く候はんには、仰までも候はず、犬死せん人の御供、其の詮なし。重次若年の昔より、こゝかしこの軍に從つて、眼射られ、

貧はぬ手も候はず

(一)北條氏直。

はかゞしき踵を旋らすべからず

指落され、足切られて、貧はぬ手も候はず。人のかたはといふ程のかたはは、重次が身一つに集りて、世に交らん事叶ふべき身ならず。殿の御情深ければこそ、當家にては人に恐れも敬はれも仕れ。殿の亡くならせ給ひなば、他人までも候まじ。まづ御聟の北條殿(一)、我が國々を取らんとし給はんに、若き人人が、行末久しう仕へんと頼みきつたる主に、忽ち別れて氣おくれし、はかゞしき矢の一筋をも射出す事叶ふべからず。當家亡されん事、また踵を旋らすべからず。重次それまでながらへて、あの年寄りたるかたは者は、德川殿の譜第にて何がしといはれし家人なるが、いかに惜しき命なれば、かく世には耻を曝すらんと、後指さゝれん事、老の耻何事か之に

(一)武田勝頼。

ことわり至極

過ぎ候べき。此の比までも武田(一)の家人等御當家に召されて、さらぬ人にも手を束ね、膝を屈めしを、世にもあはれに思ひしが、今は此の老人めが身の上になつて候と存ずれば、殿に後れ參らせんが悲しきばかりにも候はず。我が身の果もあさましきに、まづ御先に死する事にて候。」と申す。「汝がいふ所ことわり至極せり。さらば醫療の事は汝が心に任すべし。天命既に至りて家康空しくならんとも、汝も亦家康が心に任せ、いかなる耻を見つべくとも、一日も生殘りて、後の事よきに計らふべしと存ずるや、いなや。」と仰せければ、「重次が申す旨に任せられんには、重次いかで復仰を背き參らすべき。」と申す。「さらば醫師召させよ。」とて召さる。

艾

(一)Besançon.
呱々の聲

醫師やがて參りて、「御灸治よろしかるべし。」と申せば、重次艾とつてすうる。御灸の痛み覺えさせ給はねば、艾を增し加ふる事多くして、後いさゝか痛ませ給ふ由仰せければ、御藥をつけて參らせ、御藥湯をも進め奉りしに、其の夜の半ばに、御腫物潰れて、膿血夥しう流れ出で、御惱立所に輕ませ給へば、重次は嬉し泣に聲を限りに泣く。御前伺候の人々も、感涙を共に流しけり。此の人かゝる奉公の事ども、世に傳ふる事多し。盡く記すに暇あらず。大略を記すのみ。

―藩翰譜―

一七　ユーゴーの母

下田歌子

西暦一千八百二年の二月、佛蘭西のベサンソン(一)市に呱々

(一)Victor Hugo.
有名なる佛國の詩人。（西暦一八〇二―一八八五）

不扳

蒙を化して賢たらしむ

(一)Joseph Leopold Hugo.

の聲を上げたヴィクトル・ユーゴーは如何なる小兒であつたか。身の長は尺に滿たず、頭は非常に大きく、手足は極めて細く小さく、頸の骨は無きが如く軟で、生れて十五箇月の間は少しも首がすわらず、ぐにや〳〵として、始終胸の方へうな垂れて居た。其の不具らしい虛弱な兒が、他日大いに世界に名聲をあげて、「佛蘭西のユーゴーに非ず。ユーゴーの佛蘭西なり。」といはれるに至つたのは、そも誰の力であらう。言ふまでも無く、賢にしてかつ健な母が、不扳の耐忍と精密なる注意とによつて、弱を變じて强となし、蒙を化して賢たらしめたからである。

ヴィクトル・ユーゴーの父はジョセフ・レオポルド・ユーゴ

Napoleon I.

(二) Joseph Bonaparte.

都度

撫育す

ーといふ人で、早くから軍籍に身を置いたから、彼のナポレオン第一世及び其の弟ジョセフ・ボナパルト(二)に仕へて少將まで進んだ。當時戰亂の世の事であつて、此處彼處に出征を命ぜられ、初の程は其の都度家族を携へて往つたが、父も其の煩に耐へず、且種々の困難もあるので、遂に巴里に止めて、子供の教育は母の手に一任することとした。然るにユーゴーの母は賢明にして且膽力あること、殆ど丈夫も及ばぬ程であつたから、ユーゴーと二人の兄とを撫育して到らざる所無く、訓誡實に其の當を得た。

ユーゴーの母は子を教ふること嚴正で、其の命令が能く子供に行はれた。一二の例證を示せば、次のやうな事もあつ

後園

た。ユーゴーが七八歳の頃、其の後園に多くの果物がなつて居たが、母は子供に誡めて、一つでも母の許を得なければ採ることはならぬと命じたので、ユーゴーは或日「母樣、あの果物が若し能く熟して落ちて居ても取つてはいけませぬか。」と聞いた。母は直ちに「勿論。」と答へた。ユーゴーは重ねて「そんならば、落ちて腐つてしまつても、取つてはいけませぬか。」と問ふと、母は又同じやうに答へた。それ故、果物の落ちて腐敗したのが澤山あつたが、誰も拾ふ者は無かつた。

又隣家へ、テランドといふ天文學者が引越して來て、隣に男の兒が許多居るのを見て、庭にはいつて來て騷がれては迷惑だからとて、隔の垣を作らうとした。するとユーゴーの

母は、「其の儀ならば御心配には及びません。『お隣の庭へ行つてはならぬ。』と申しつけますから。」と言つた。其の時テランドの心の中では、「さういふものの、頑是無い男の子供の事だから、おぼつかないものだ。」とかう思つて居た。然るに爾後何箇月立つても、此のテランドの庭内には、小さい靴の跡は一つも附かなかつた。

ユーゴーの母は幼き子供を携へて、西班牙から巴里に還つて棲んだが、其の家は、庭園も廣く、種々の草木が榮えて、四時をり〳〵に花咲き實を結ぶ一小天地の樂園で、母子は世界の兵塵も餘所にして、茲に平和な春を樂しんで居たのである。然し其の當時の教育界に、智德の必要を說く風が熾で、兵塵も餘所に

ユーゴーの幼時

まだ體育の方に注意を向けなかつたにも拘らず、賢き母は子供の體力の增進を圖り、さまざまの方法を以て體育を奬勵した。又ユーゴーが文學の天才であるのを見て、之に教へていふには、「御前は文學で生活の道を立てようとは思ふな。生活の道は外に講じなければならぬ。それで無ければ、とても眞正に高尙な文學者となることは出來

ませぬぞ。」と敎へた。子供には園藝、大工、又は他の手工學を正課の外に修めしめて、專ら自ら立つの精神を修養させたのである。

一千八百十七年、佛國學士會院で、題を設けて懸賞の詩を募つた時、ヴィクトル・ユーゴーは十五歲であつたが、此の募集に應じて出した詩は、最優等であつた。

其の後、母は肺炎衝に罹つて病床に呻吟して居たので、子供は日夜其の傍を去らず、心を盡して看護した。此の大病中も、母はユーゴーの詩を見るのを樂しんで居たのであるが、或懸賞詩の募に應じて、ユーゴーは一詩を送らうとしつゝあつた折柄、母の大患に遭つたので、看護に追はれて、其の方

肺炎衝

に心を移す暇が無かつた。一日母はユーゴーに、「此の間應募しようといつた詩はもう出來たか。」と問うたので、ユーゴーは、「まだ作りません。」と答へると、母は、「いくら臨時の用が出來ても、詩を止めるやうな事はいけない。勉めて早く作つたらよからう。」と、輕く誡めたが、さも〳〵失望らしい樣子であつた。それから暫くすると、母はすや〳〵と睡に就いたので、其の間にユーゴーは忽ち鉛筆を取つて急作の詩を書いて、其の紙片をそつと睡つて居る母の手に置いた。母は睡から覺めて、之を讀んで、はら〳〵と落涙して喜んだ。

此の母の熱涙に濕うた所の詩篇は、其の時應募詩中の最優等たる喝采を得た。

喝采

母は遂に起つこと能はずして、愛兒が孝行な看護の手から離れて、不歸の旅人となつてしまつたけれども、佛蘭西の文豪ヴィクトル・ユーゴーの名は、此の母の丹誠によつて、永く世界に傳はる事になつたのである。

——良妻と賢母——

不歸の旅人

降りみ降らずみ

一八　武藏野日記

國木田獨歩

九月七日——「昨日も今日も南風強く吹き、雲を送りつ雲を拂ひつ、雨降りみ降らずみ、日光雲間を洩るゝ時、林影一時に煌く。」

これが今の武藏野の秋の初である。林はまだ夏の緑の其のまゝでありながら、空模樣が夏と全く變つて來て、雨雲の南風につれて、武藏野の空低く頻に雨を送る。其の晴間には日の光が水氣を帶びて、彼方の林に落ち、此方の杜に輝く。自分は屢思つた、こんな日に武藏野を大觀することが出來たら、如何に美しいことだらうかと。二日置いて九日の日記にも、「風強く秋聲野に滿つ。浮雲變幻たり。」とある。ちやうど此の頃はこんな天氣が續いて、大空と野との景色が間斷なく變化して、日の光は夏らしく、雲の色、風の音は秋らしいのを、極めて趣味深く自分は感じた。

變幻

まづ之を今の武藏野の秋の發端として、自分は冬の終る頃までの日記を左に並べて、變化の大略と、光景の要素とを示して置かうと思ふ。

九月十九日――「朝空曇り風死す。冷霧寒露、蟲聲しげし。天地の心なほ目さめぬが如し。」

同二十一日――「秋天拭ふが如し。木葉火の如く赫く。」

十月十九日――「月明らかに、林影黑し。」

同二十五日――「朝は霧深く、午後は霽る。夜に入りて雲の絶間の月冴ゆ。朝まだき霧の霽れぬ間に家を出で、野を歩み、林を訪ふ。」

朝まだき

同二十六日――「午後林を訪ふ。林の奥に坐して四顧し、傾聽し、睇視し、默想す。」

睇視す

十一月四日――「天高く氣澄む。夕暮に獨り風吹く。野に立てば、天外の富士近く、國境をめぐる連山地平線上に黑し。星光一點、暮色漸く到り、林影漸く遠し。」

同十八日――「月を蹈んで散歩す。青煙地を這ひ、月光林に碎く。」

同十九日――「天晴れ、風清く、露冷かなり。滿目黃葉の中、綠樹を雜ふ。小鳥梢に囀ず。一路人影なし。獨り歩み默思口吟し、足に任せて近郊をめぐる。」

同二十二日――「夜更けぬ。戸外は林を渡る風聲もの凄し。滴聲頻なれども、雨は已に止みたりと思し。」

同二十三日――「昨夜の風雨にて木葉殆ど搖落せり。稻田も殆ど刈取らる。冬枯の淋しき樣となりぬ。」

同二十四日――「木葉未だ全く落ちず。遠山を望めば、心も消

入らんばかり懐かし。」

同二十六日――夜十時記す。「屋外は風雨の聲もの凄し。滴聲相應ず。今日は終日霧立罩めて、野や、林や永久の夢に入りたらん如し。午後犬を伴なうて散歩す。林に入り默坐す。犬眠る。水林より出でて林に入る。落葉を浮べて流る。をりをり時雨しめやかに林を過ぎて落葉の上を渡りゆく音、靜かなり。」

同二十七日――「昨夜の風雨は今朝なごりなく霽れ、日麗かに昇りぬ。屋後の丘に立つて望めば、富士山眞白に連山の上に聳ゆ。風清く、氣澄めり。げに初冬の朝なるかな。」

田面に水溢れ、林影倒に映れり。」

十二月二日――「今朝霜雪の如く、朝日にきらめきて見事なり。暫くして薄雲かゝり、日光寒し。」

同二十二日――「雪始めて降る。」

一月十三日――「夜更けぬ。風死し林默す。雪頻に降る。燈をかかげて戸外を窺ふ、降雪火影にきらめきて舞ふ。あゝ武藏野沈默す。而も耳を澄せば、彼方の林を渡る風の音す。果して風聲か。」

同十四日――「今朝大雪。葡萄棚墮ちぬ。」

夜更けぬ。梢を渡る風の音遠く聞ゆ。あゝこれ武藏野の木より木を渡る冬の夜寒の風なるかな。

雪どけの滴聲軒をめぐる。」

同二十日――「美しき朝。空には片雲なく、地には霜柱白銀の如くきらめく。小鳥梢に囀ず。梢頭針の如し。」

二月八日――「梅咲きぬ。月漸く美なり。」

三月十三日――「夜十二時、月傾き風急に、雲涌き林鳴る。」

同二十一日――「夜十一時。屋外の風聲をきく、忽ち遠く忽ち近し。春や襲ひし、冬や遁れし。」――武藏野――

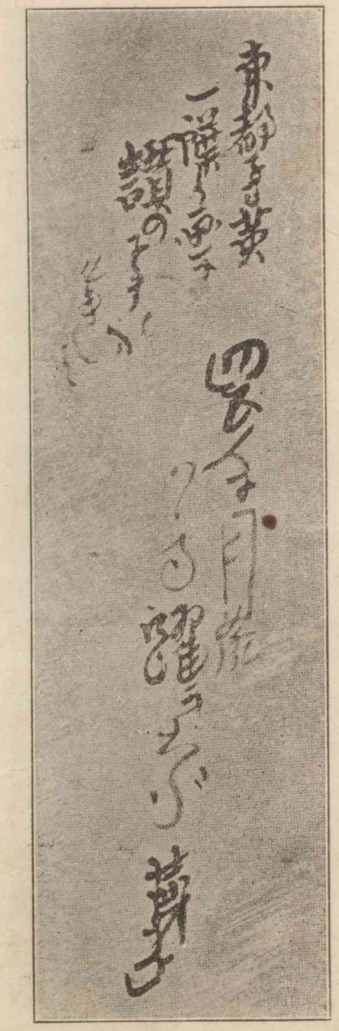
一九　秋冬の句

白露や無分別なるおきどころ　宗因

秋風や茄子の數のあらはるゝ　木白

東都なる英一蝶が畫に讃のぞまれければ

四五人に月おちかゝる躍かな　蕪村



蕪村筆蹟
（伊藤松宇氏藏）

小坊主の門に立ちけり秋の暮　闌更

鹿鳴くや木の葉かく僧唯一人　黑梅

蜻蛉の顏はおほかた目玉かな　知足

角力とり並ぶや秋のから錦　嵐雪

嵐雪筆蹟

すむ月や髭をたてたるきりぐす　其月

桑の芽のわづかに青し
花大根　子規

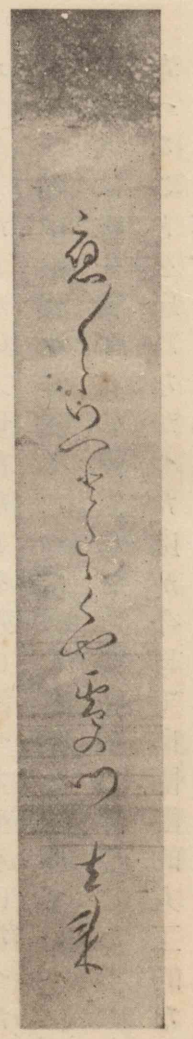
あか〳〵と日はつれなくも秋の風　芭蕉
語草すでに盡きぬる夜長かな　四方太
としぐ〳〵に天長節の日和かな　鳴雪
園の戸をがたんぴしやんと秋の風　把栗
南天の實をこぼしたる目白かな　子規

子規筆蹟

きりぐ〳〵す鳴くや貧女が機の下　牛里
家問へば木槿の垣の三軒目　樂天
あさ漬の大根あらふ月夜かな　俊似

應々といへどたゝくや雪の門　去來

しぐるゝやもみの小袖を吹返し　去來
こがらしや炭賣ひとり渡舟　蕪村
馬の息ほのかに寒し今朝の霜　民丁



去來筆蹟

井のもとの草葉に重き氷柱哉　鬼貫
葱白く洗ひ立てたる寒さかな　芭蕉
水底を見て來た顔の小鴨かな　丈草
餅搗の臼往來す京の町　把栗

點出（ぽつ〳〵と諸所に出されること。）**意識に上る**（考へ出される。）**翫賞**（もてあそびたのしむこと。）**自然界にあつた姿**（天然のまゝにあつた姿。）**園藝的**（手をかけて作りあげたやうな。）**培養**（植物をそだてること。）**鉢物**（植木鉢にうゑたもの。）**聯想**（或事につれて思ひ出すこと。）**自然味**（天然自然のままのおもしろみ。）

自修文

二〇　花合戰

有島生馬

吾々日本人が、花といふ時には、櫻のやうな樹木にしろ、秋の七草のやうな草花にしろ、重に自然のうちに、點出されたものが意識に上つた。それが今日では大分變つて來て、ダリヤだとかカーネーションだとかいふ切花などを、頭に浮べるやうになつた。つまりその點は餘程西洋臭くなつて來た。言葉を變へていへば、從來日本人は唯一輪の花の翫賞にも、その花の自然界にあつた姿を考へることを忘れなかつた。處が今日では園藝的人工的な花、即ち花畑で培養され、鉢物にするなり、切花にするなりしたものを、直ぐ聯想するやうになつて來た。この人工的になつた點が、西洋臭いのであると私は思ふ。

吾々從來の趣味からいへば、自然味の少い西洋流の花は俗で

俗（いやしいこと。ひんのないこと。下品。）**食ひ足らぬ**（もの足らぬ。不滿足である。）**雜草**（名もない草。）**飽滿**（十分にあきみちること。）**習癖**（くせ。ならはし。）**野趣**（ぬからしいおもむき。）

ある筈だ。又西洋人からいへば、日本流の寂しい花だけでは、食ひ足らぬ恨みがあつた筈だ。吾々が西洋に行つて感ずる事は即ちそこだ。西洋の花は花屋の硝子窓の中にある。花は土から自然に生えてゐるものといふ事は殆ど忘れてゐる。幹もない、枝も葉も少い、花輪だけある。たまに土の上に咲く花を見得るとしても、植木鉢か、公園の花壇の中に行儀よく並んでゐる花である。私は花があゝいふ風に取扱はれてゐるのを見ると、餘り面白く思はない。どんなによく人工的に造られた花でも、路傍の雜草に交る名もないやうな小さな花の趣には、かなはないものだ。飽滿といふ事は、日本人の餘り感じない、然し西洋人がどこまでも求める一つの習癖だと思ふ。花に對しても、彼等の趣味はさうなつてゐる。

西洋にだつて田舍のない事はない。田舍には野も森もあり牧場や庭園のない事はない。又そこに自然な花の咲かないことはない。實際日本にもないやうないゝ花の野趣がある。然し西洋の

映ずる　うつる。
豐麗　非常にうるはしいこと。
吉凶　おめでたいことや、不吉。
贈答用　おくつたり、もらつたりする用。
豐富　たくさんあること。
聖母　耶蘇の母マリヤ。
特有　それにだけあつて、他にないもの。
詩的の風情　詩のやうなあぢはひ。

生活は都會の生活だ。人間の眼に映ずる西洋の花は、商店の硝子窓の中に飾られてゐる優しくて豐麗な人工的な花に限られてゐるのは止むを得ない。之は一般の交際、吉凶その他多くの贈答用にも供されるのである。

伊太利で野生の花は羅馬以南よりも、以北の方が豐富のやうだ。でも南でも、春から夏にかけては、雜草の中に相應に樣々な種類の花が咲く。それを田舍の婆さん達や女子供が、摘みとつて聖母の小祠の格子の間などに挿して置く。この習慣は伊太利特有なものである。寂しい田舍の夜道などで、ぼんやりした燈明の影に凋れた一握の草花の捧げられてゐるのを見出すのは、この上もなく懷かしい感を起させるものだつた。又北伊太利には、池沼の中に睡蓮がよく繁茂する。それを取つて來て、娘などが自分の部屋の洗面鉢の中に入れて置く（洗面鉢が花瓶に代用される）。その水で化粧をする。こんな詩的な風情は、文章の中によく出て來

人と交渉を保つ　人と關係をもつて居る。
隷屬　つきしたがふこと。
印象　心にのこされた形跡。
田舍びてゐる　ゐなからしくある。

るが、花もこの位の程度で人と交渉を保つてゐる中がいゝ。今日では餘り人間に隷屬し過ぎてゐる。

伊太利に於ける花に關する話として、他の事はともかく、一つ言ひ忘れてならぬ事がある。都會の辻々、廣場々々で見かける花賣の多い事である。之は外國の旅客が誰でも常に驚く處で、亦永く伊太利旅行の記憶と結ばれて、忘れる事の出來ない印象である。

この花賣は、伊太利中、どこの都會にでも、どこの辻にでも、廣場にでも、カフェーにでも、料理屋にでも、芝居にでもゐる。もしくはさういふ處へはいつて來る。さうしてうるさく押賣をする。それには近在の田舍から來る貧しい少女などが多い。この花賣の風習は、歐洲各國どこにでも多少ある事だ。然し伊太利では特にそれが盛だ。さうしていかにもそれが田舍びてゐて、親しみがある。今日では隨分この花賣の習慣を嫌がる旅客が多くなり、花賣の方

でも少しやけ腹の方で、づう〳〵しくなつてゐる。客も賣手も共に無邪氣なこの習慣を、餘りにビジネスライク(一)に見過ぎてゐるのは困る。

伊太利花賣の風習は、羅馬で一番目立つてゐる。それは數も多いし、花賣娘が一種變つた風俗をしてゐるからである。彼等は羅馬郊外の小村から、朝毎花束を籠に入れ、頭の上に乘せて、羅馬城内へやつて來るのである。ちやうど京都の大原女に似てゐる。花の種類は菫、薔薇、石竹位に殆ど限られてゐる。

北伊太利及び南佛蘭西の地中海に瀕する一帶の地は、歐洲各國の花の顧客に對する温室みたやうな處だ。冬の間北歐、遠くはスカンディナビヤ邊までの需用は、此の地方に栽培される花によつて充たされてゐる。それだけ諸種の花市は盛大を極めてゐる。

この地方では「花合戰」といふ祭が、冬の末から春にかけて二三回づつ一つ町に行はれる。此もなか〳〵見事なものである。まづ

(一) Businesslike. 一の業務ででもあるやうに見過ぎる。

郊外　町はづれ。

大原女　京都附近の大原から花や薪などを頭にのせて京都へ賣りに出る女。

顧客　かほうて。とくいく。

北歐　北部歐羅巴。(一) Scandinavia. スウヱーデン及びノルウエーのこと。

興奮　氣の勢だつこと。

會場を定め、花馬車を出し、花を着飾つた人々が花の中に埋つてそれに乘る。どの車が一番見事か、賞をつけ合ふのである。その何十輛といふ花車の行列が、見物人の棧敷の前を幾度もぐる〳〵廻る。その際、棧敷と車上とで、小さな花束の投合ひをやるのである。終には道が花束で一面に埋まる。その花を六頭立位な馬が引いて行く。香、色、聲、笑、動作、興奮、これ等が一緒になつて、そこに作り出す一種の氣分は、隨分華やかなものである。さうして最後に等級に依つて、立派な刺繍のしてある優勝旗が授與されるのである。これが所謂「花合戰」である。

—美術の秋—

二一　和宮内親王の御婦德　其の一

萩野由之

維新の政變は社會組織の一變する時代であつたから、種

種な英雄偉人が各方面に現れた。此に於て、西郷隆盛とか、大久保利通とか、岩倉具視とかいふ人々も出た。英雄偉人は必ずしも男子にのみ限つたものでないから、女子にも非常な偉い人の出たのは當然である。さうして働かれた方面こそ異なれ、其の事業は決して男子に劣らないのであつた。和宮親子内親王と申し上ぐる御方の如きは、其の婦人の中の第一の御人物である。

御臺所

和宮親子内親王は孝明天皇の御妹君で、明治天皇の御叔母に當らせられ、德川第十四代將軍家茂公の御臺所におなりになつた方である。我々はかゝる完全な模範的婦人を尊き皇族の御中に見るのを、無上の光榮と信ずるのである。

示威的

國是

降嫁

德川幕府が長き泰平を續けて三百年近くになつた頃には、政治は次第に衰へて、もはや天下の人が德川氏の政治に厭いて來た。そこへ始めて外國から示威的に交際を求めに來たので、幕府は兵備が無いから餘儀なく交易を許さうとする、朝廷では外國を拒絶しようとする。民間の議論も無論外國との交際を嫌うた。そこで幕府は朝廷と一致して、國是を定めなければならぬが、幕府の威力が到底それには足らぬ。よつて皇室の御威光を假りて、即ち皇室と德川將軍とは親睦一致である事を天下に示して、其の上で外交上の處分をしようと考へた。幕府は其の一手段として、孝明天皇の御妹君たる和宮を將軍家茂公の夫人に申し受けたいと、御降

嫁を奏上した。宮は勿論江戸へ降嫁する事をお望みにならぬ。天皇も一人の御妹を遠方へお遣はしになる事をお喜びにならぬ。之が爲に其の緣談は容易に纏らなかつた。結局幕府は「宮の降嫁さへ相かなへば、きつと十年以内には外國人を退けませう。」と申し上げた。

人質

天皇は「外國人を退けて國内泰平になることならば。」と仰せられ、宮も「國の爲とあらば、水や火の中でも辭しません。」と申し上げられたので、勅許になつて、宮は遂に將軍の御臺所として江戸へお下りになつた。即ち文久元年御年十六の時であつた。

そこで當時の志士はこれを聞いて、「幕府は宮を人質として江戸へ御迎へ申すのである。」と申して憤慨し、はては、「幕府討たざるべからず。」といつた者さへあつた。さて御降嫁の後も、世の中は愈多事となつて、十四代將軍も席温る暇もなく、京都へ出張したり、大阪へ下つたりして、江戸城に居られる日とても少く、遂に慶應二年七月大阪城で薨去せられたから、宮が御夫婦の間の圓滿は、僅か五年間に過ぎなかつた。宮は亡き將軍の事を思ひ出で給ひて、

席温る暇なし

みつせ川世のしがらみのなかりせば

君もろともに渡らましものを

と詠じ給ひて、切なる思を述べさせられた。やがて二十一歳で御髪を切捨てゝ尼となり給ひ、靜寛院宮と申して、淋しい

寡居

寡居の御暮しをなされた。

二二　和宮内親王の御婦德　其の二

命脉風前の燈火

其の後、慶喜公が十五代の將軍となつたが、時勢幾度か變つて、慶應三年十月には慶喜公は政權を奉還し、翌年正月には鳥羽、伏見の戰爭が起つて、前將軍は江戸へ逃歸り、官軍は江戸城の總攻擊をしようと、諸方から江戸へ迫つたので、德川氏の命脉は風前の燈火の有樣となつた。此の時德川の家をして全きを得しめたのは、實に靜寛院宮の御力が主なるものであつた。

宮は京都大阪邊の騷は薄々御聞きになつて居たが、慶喜公が俄に江戸城に歸つて宮に拜謁を願ふと、宮は慶喜公の爲には先代の夫人だから、宮も一方ならず御心配になつたものの、「もしや慶喜に朝敵たる行があつたのならば、とても面會は許されない。」と確乎と申された。二十一歳の寡夫人の御詞としては、何と凛々しいものではないか。

確乎

凛々しい

然るに、第十三代將軍家定公の御臺所たる天璋院夫人の執成もあつたので、面會は御許になつた。そこで慶喜公も、宮に伏見、鳥羽の戰爭のあらましから、自分には朝廷に對して敵對の心は露程も無いことを申し開いて、是非々々京都に對して宜しきやうに御取扱を願ひますと懇願せられたので、宮もそれならば德川家の一大事と思し召されて、愈力を

申し開く

御入れ遊ばされる事になつた。

そこで朝廷の方へ、侍女の土御門藤子といふを遣はされて、徳川家の家名だけはお立て下さるやうにと、切に申し送られたが、其の御文言の中には、

「官軍を差向けらるゝやに承り、當家の浮沈此の時なりと心痛致候。此の度の一件はともかくも重々不行屆の事故、慶喜一身を何樣にも仰せ付けられ、何卒家名は立行き候樣幾重にも願度候。後世まで當家朝敵の汚名を殘し候事は、私の身にとりて實に殘念に存候へば、汚名を雪ぎ家名相立つやう、私身命にかへて願上候。是非々々官軍差向けられ御取りつぶしに相成候はゞ、私も當家の滅亡を見つ

汚名を雪ぐ

つながらへ居るも殘念に候まゝ、きつと覺悟を致候所存に候。私一命は惜しみ申さず候へども、朝敵と共に身命を捨候事は、朝廷へ恐入候事と、誠に心痛致居候。」

と仰せられて居る。御決心の雄々しい樣子が顯れて見えるではないか。

御身は皇室の御出でありながら、一度徳川氏へ降嫁あらせられた上は、徳川家一門と共に生死を共にせねばならぬと、確と御決心ましました上の事でなくては、とてもこれ程の御文は出來ぬことと察し奉られるのである。

宮の朝廷へ出された御手紙は數々あるが、御決心はますます固くあらせられた。殊に朝廷から内々「江戸は戰爭にな

所存

貞操義烈

るから、京都へ御歸りがよろしからう。」と申越された時の御返事には、取分け貞操義烈の御心掛が明らかに見えるものがある。

宮の御力によつて、德川家の處分も事なく終り、德川龜之助殿即ち今の家達公に、御家御相續の勅命が下り、次いで駿河、遠江、三河の三箇國の中で七十萬石を、德川家の領地として下し賜はる旨の御達があつて、德川家の命脈も永く續くこととなつたが、事のこゝまでに運ぶには、宮の御心盡しが最も大なるものであつた。

宮の御命にかけても思し召されたかひあつて、德川家は永續する事になつたから、明治天皇は如何にもして、宮の

竣工
香華

御心を慰めんものとの思召で、「今は京都にお歸りになつて、心安くお暮しの方が宜しからう。」と御勸め申し上げられたところ、宮は、

「江戸には芝の增上寺、上野の東叡山寛永寺など、德川家祖先累代の廟墓所がありますのみならず、增上寺内なる亡夫昭德院樣の墳墓は、未だ靈屋の建築も竣工仕りません。今日私が江戸を去つて京都へ永住しますれば、何人も香華を供へ墓の塵を掃ふ者もございません。両寺の墳墓は、空しく草や苔に埋つてしまひますから。」

と申して、暫し上京の猶豫をお願ひなされた。

さて德川が靜岡に移住のことなど、皆事無く濟して後、明

治二年正月、久々振にて御上京あらせられ、明治天皇に御對面あつて、暫し御滯留で、明治七年東京にお歸りになつたが、十年九月脚氣の御病症で、箱根塔之澤に御轉地あらせられ、遂に彼の地で昭德院の後を追はせられた。御年僅かに三十三歳であつた。金枝玉葉の御身を以て、家國の難に遭遇して、しかも其の進退宜しきに適ひ、志操愈堅固に、よく婦德を守つて一生を終り給うた宮の御事蹟は、古今に珍しく、永遠に女子の龜鑑である。靜寛院宮と申すは其の法名である。

金枝玉葉の御身

法名

—讀史の趣味—

二三　朱買臣

(一)漢の代の吳の人。元鼎元年(西暦一一六)歿。
(二)浙江省紹興府城の東南。

相具す

相念ず

むかし朱買臣(一)、會稽(二)といふ所に住みけり。世々貧しくてわりなくて、せんかたなかりけれど、書讀み物習ふこと、よるひる怠らず。そのひまには薪をこりて、世を渡るはかりごとにぞしける。かくて年月を經るに、相具しける女、限りなく貧しきすまひを堪へ難くや思ひけん、「我も人もあらぬさまになりて世を試みん。」など、こまやかに打語らひければ、「かくてしもやありはつべき。猶今年ばかりは心づよく相念ぜよ。」と、よろづに宥めけれども、遂に聽かで、その年の內に離れにけり。男悲しめども、いふがひなくて、次の年にもなりにけり。

此の人のざえ、學、世に勝れたる事を帝聞かせ給ひて、其の國の守になされぬ。始めて國に下りける有樣、心、言葉も及ば

暮るゝやおそき

ずめでたかりけり。かゝれども、猶ありし妻の事を心にかけて、一國の中を尋ね求めさすれども、似たる人なくて明し暮すに、野に出でて狩し遊びける時、怪しく佗しげなる賤の女が、筐（かたみ）といふ物を臂にかけて、菜を摘みゐざりありくを、ゆゝしげのものの有樣やと見る程に、我が昔の妻と見なしてけり。猶僻目にやと、目を留めて見るに、いかにもたがふ所なかりければ、人知れず悲しく覺えて、暮るゝやおそきと呼びとりてけり。女「我が過つ事もなきに、いかなる事にかあたりなんずらん。」と恐れ惑ひけれど、ありし昔の事などを、こまやかに語らひければ、女あさましく覺えて、この男を打見るより、いかゞ思ひけん、いたく惱み煩ひて、曉方に絶入りにけり。

もろともに錦を着てぞ歸らまし
うきにたへたる心なりせば

心短きは、何事につけても口惜しき事にこそ。錦を着て故郷に歸るとは、この人の事なり。

—唐物語—

二四　女流の俳諧

坪内逍遙

徳川時代には、女流にして俳諧を能くせし者少からざりき。曩に學べる千代女の外、園女(二)、すて女(三)、智月(四)、秋色(五)、花讃(六)などあり。皆同じ頃の人なり。園女の句に、

いそがしや菫を摘めばつくづくし
春の野遊のさま、見るやうなり。

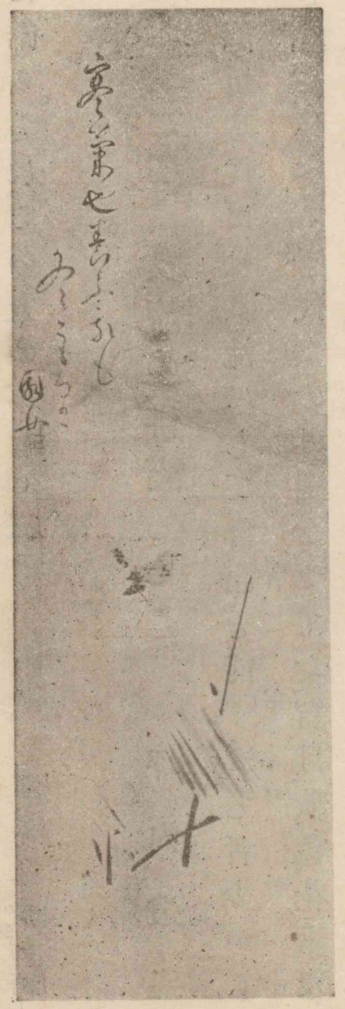
(一)本書卷三第十九課參照。
(二)岡西惟中の妻。享保十一年（一三八六）歿。年六十三。
(三)丹波國柏原（かいばら）の人。元祿十一年（一三五八）歿。年六十四。
(四)近江國大津の人。芭蕉の門人。
(五)名は秋。其角の弟子。本書卷一第三課參照。
(六)傳詳ならず。

はな紙のあひだにしぼむ菫かな

摘取りし菫の花を程經て見出でて、萎れたるをも捨てかぬる女心見えてしをらし。

しをらし

寒菊や養ふ我も冬ごもり　園女



園女筆蹟

衣がへみづから織らぬ罪ふかし

春となり、秋と移るにつけても、母の恩の深きを思ふ心根の殊勝なるを見るべし。

あき入にどんとめいたり小鳥ども　智月

負うた子に髪なぶらるゝ暑さかな

汗の流るゝ暑き日のさま思ひやらるゝなり。智月の句に、

智月筆蹟
（伊藤松宇氏藏）

鶯に手元やすめん流しもと

やさしき娘心見えて愛らしからずや。

朝顔の咲くや親にも叱られず

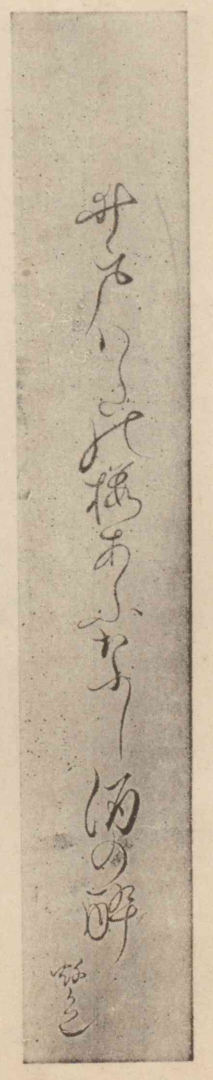
けさは幾つか咲出でしなどと、早起するも花ゆゑ、叱られぬも花ゆゑとなり。すて女、

雪の朝二の字二の字の下駄の跡

これは六歳の時の句なりとぞ。秋色の句に、

雉の尾のやさしうさはる菫かな

とは雉の姿の優しく美しき風情を寫せるなるべし。なほ、



秋色筆蹟

といふ名高き句あり。花讃、

かんざしよ櫛よさて世は暑いこと

うるさきは髪かざりなり。洗髪などにて涼まば如何にとの心なるべし。

子を寝せた間をぬけ出でて涼かな

(一)本書卷一第三課參照。

母とならではえ知らぬ涼しさなるべし。なほ千代女の句一二を擧ぐれば、

鶯や又いひなほしいひなほし

ころびても笑うてばかり雛かな

など、いづれもめでたし。總じて女は物に感ずること深くかつ細かき處までも思ひやり屆く故に、其の詠出でたる句も亦あはれ深し。

—國語讀本—

二五　手紙二章

一　女中の周旋を賴まれたる友に答ふ

朝夕の寒さ肌にしむころと相成候處、皆々樣御障もこれ

無くや。母上樣御旅行中、あなた樣御一人にて、さぞかし御忙しき御事と存候。それにつけても、先頃の御たのみ、早く御返事申上げたしとは存じながら、父の所用思の外にながびき、昨夜やう〳〵歸宅の事とて、延引致候。

心あたり

父もあちらへ參り候ひてより、心あたりを聞合はせ、人にこれはと思ふ者

も賴みおき候由には候へども、何分にも田舍の忙しき折、これはと思ふ者も見當らざりし由に候。併し連れ戻り候者は、

まんざら

父の宿りし家の主人の姪とかにて、年は十七歳、初奉公の由には候へども、家貧しき爲、これまで叔母の家に參り居候者にて、多少の苦勞は致候事なれば、まんざら働けざる事もあるまじと存ぜられ候。家族は母の外、兄弟妹各一名にて、士族の由に候へば、鄙に育ちたる割合には、行儀作法も幾分心得居り、高等小學も卒業致候由に候。氣立は正直にて優しく、御家の事話して見候處、さる家ならば、上りて、針持つ道なども心得させていたゞき度と申候。もし思召も御座候はゞ、何時にても御目見に參上致させ申すべく候。父事參上致し、詳しく御話申上ぐべきはずの處、何分にも昨夜歸宅致し、今朝直ちに出勤致候へば、失禮ながら私よりちよつと御知らせ申上候。かしこ。

鄙に育つ

氣立

二　娘より母の病氣看護の爲歸れる女中へ

秋氣身にしみ候折柄、母樣の御病氣は如何に候や。常に親孝行のお前樣故、さぞかし御心配の事と御察し致候。まして

氣苦勞
物堅き人
よしなき事

や、弟妹方など多き事とて、御前様の御氣苦勞いかばかりならんと心配致居候。御前様の両親は物堅き人とて、これまで御前様の暇を乞ひに來られし事、曾てためし無き事なるに、此の度は弟御を迎にお遣はしなされしより察すれば、餘程の御重體と察し申候。

申すまでも御座無く候へども、よく弟妹方の御面倒、母上の御看病怠なきやうなさるべく候。殊に父上には餘程の御年の由に候へば、御心配なさらぬやう、御前様の御注意肝要に候。病人には心配は大毒、其の心配をさせぬが非常にむづかしく、よしなき事を聞きたがりて自ら心配するが、病人の常と承り候。よく〳〵御注意なされ、一日も早く御快癒の程

簡潔
冗長
誤想
立勝る

簡　みじかいこと。
意を盡す　いひたい事をのこらずいふ。
簡潔　かんたんで要を得て居ること。
冗長　くだ〳〵しく長いこと。
誤想　おもひちがひ。
立勝る　よほどまさつて居る。

祈上候。

こちらの事は私が代りて致居候へば、いさゝかも御心配下さるまじく候。先はお見まひまで。　かしこ。

自修文

二六　手紙を書く心得

幸田露伴

すべて文章は辭簡にして意をよく盡すを以て理想とすべし。就中、書翰文は簡潔を以て主となすべし。多くの場合に於て、文句の冗長なるは好ましからず。或人は書翰の短きは人に對する尊敬、若しくは愛憐の情薄きに似たりと誤想するものあれど、辭簡に情多きは、情少くして辭多きに比すべくも無く立勝れり。情の厚薄は、辭の長短にあらずして、意の如何にあり。書列ねし文句のみ如何ばかり長ければとて、其の情こまやかならざらんか、そは

繁文縟禮　わづらはしい飾、こみ入つた儀式。少し轉じて面倒な禮儀の意。
披見　ひらいて見ること。
さる身の際　然るべき身分の人。
頻繁を極む　非常に度々でせはしい。
用事を以て旨とする日用文　用事をのみ目的とする手紙の文。
誤解　かんがへちがひ。
趣味の書翰　おもしろみを主とした手紙。

唯繁文縟禮に終らんのみ。

世に事の繁き人は、一日の中にも數通若しくは數十通の書翰に接す。此等の人々にして、徒に長くくだ〳〵しき書翰にのみ接せんか、一々それらを披見するは、恐らく一つの苦痛なるべし。然るに世に事業を爲さんとする程の人は、如何に苦痛なればとて、我に來る書翰を委しく披見せずして止むが如き事は無からん。されば、かゝる人に向ひて繁文縟禮を重ぬるは、誠に心なき所爲なりといふべし。よしやさる身の際ならぬ人にしても、交通日々に頻繁を極め、勢ひ時間を貴重せざるべからざる今日に當りて、益なき事を長々しく書列ぬるは、如何なる點よりするも、決して賞すべきことにあらず。要するに、用事を以て旨とする日用文は、なるべく簡單にして、誤解を生ぜざらしむるを以て主となすべし。

次に趣味の書翰、純粹の用事ならざるものの如きも、長きは餘

明瞭　はつきりして居ること。
趣多く　何となく面白味が多い。
韻致　風流な面白味。
品少し　下品である。
體を得る　形がそなはる。
懇篤　ねんごろで、ていねいなこと。

り好ましからず。これもなるべく簡單明瞭に記して、誤解を生ぜざらしむる樣に心掛くべし。此の類の書翰の長きは稍忍ぶべし。然れども、これまた簡潔にして趣多く、情こまやかにして正確を失はず、韻致に乏しからぬ樣に心を用ひて物すべし。以上の心掛をよそにしては、千言萬語を列ぬとも、そは「ことば多ければ品少し」といふ弊に陷るべし。されど、一概に簡單にとのみ言はんも弊なきにあらず。例へば、旅行先より父母の許へ狀況などを報ずる文には、あながち簡單なるばかりを以て、よく其の體を得たるものなりとはせず。言ふまでもなく、簡單にして其の要を盡し得なば、これ最も好ましきものなれども、そはすぐれたる筆の力を有する人ならでは、なす能はざる所ならん。されば、かくの如き場合には、簡單といふよりも、むしろ親切懇篤ならんことを主として、場合によりては、我が日記の全部を記し送るも妨なし。かくの如き場合に當りて、長きを厭ふは愚なるわざなりと謂ふべきなり。

生漢語生古文　十分熟練したる漢語や、へたな古文。

間切る

押切る

底る

あだに心の煎らるゝもの

要するに、書翰文の作法は、書翰を受取る人になりて見て一考すれば、如何なるものが然るべきか、忽ちに明白なるべし。己上手なりといはぬばかりに、生漢語、生古文を振廻して書ける書翰ほど、見にくきはなし。

二七　潮まつ間

幸田露伴

風に逆ひて舟を行るには、間切るといふ工夫もあり、流に逆ひて舟を進むるには、押切るといふ意地もあれど、唯春の日の潮の底りて、遠淺の海の盡く干潟となりたる時のみは、意地にも、工夫にも、舟を操らん道無く、あだに心の煎らるゝものなり。

曾て此の事をいひ出でて、「さる折にも何とか爲すべき手段ありや。」と、老いて物事に巧者なる舟人に問ひけるに、舟人打笑ひ、「何時にても纜を解かんとならば、何時にても水ある所に船を繋ぐべし。我等は繋ぐ時に解くことを思ひて繋ぎ、解く時に繋ぐことを思ひて解く。素人は繋ぐ時は解くことを思はず。解く時は繋ぐことを思はず。こゝを以て歸らんとして歸る能はず。進まんとして進む能はず。徒に心を干潟に焦るやうの事もあるに至るなり。若し慨に干潟に居すわりたる舟となりたらんには、我等なりとて其の場に臨みて何の手段のあるべき。唯少しは早くとも、心長閑に食事など濟ませて、やがて立働かん折、足もつれのせぬやうに、舟の中を取りかたづけ、猶それにても時餘らば、舟道具を丁寧に檢め

心を焦る

足もつれ

繕ひなどして、時と潮とを待つべし。潮を待つは愚しけれども、潮を待たぬよりは賢きわざなり。何時か一度は爲さで叶はぬ事を、爲しつゝ待たば、必ず來るべき潮は、大抵其の事を爲し終へぬほどに、早く來るものなり。何時か一度爲さで叶はぬ事は、小さき舟の中にてもいと多きものなれば、潮待つ間に爲すべき事の無しといふは無し。潮待つ間に爲すべき事のあるを見出して之を爲さば、唯時の足らざるを覺ゆるのみにて、更に心の煩らるゝことなど有るべくも無し。」と言ひけり。おもしろき言葉なりと思ひしかば、今に忘れず。

—潮待ち草—

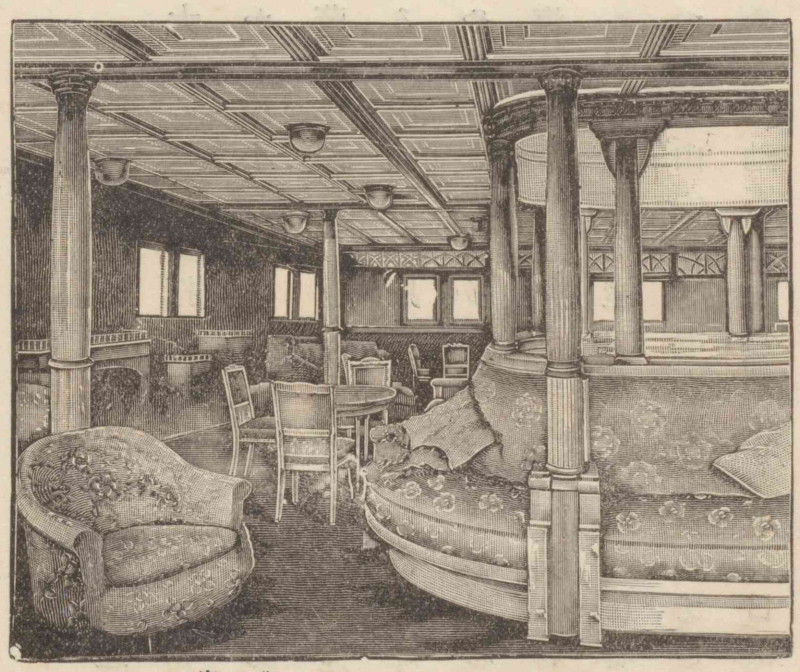
絢爛

二八　世界の歌枕　其の一

上田　敏

大西洋の浪は、太平洋のとは稍違つてゐる。太平洋の浪は大きくゆるく打つ。大西洋のはいつも天氣が惡い爲か、とにかく稍小さく鋭い。空の色の關係もあらう。其の色は澄んだ藍では無くて、稍黑ずんだ、時としては鉛のやうな色に見える。大西洋も緯度稍高くなるに隨つて、浪の色淡く、入日の花やかさは異ならないが、夕雲の色彩も稍あつさりとして、南海の絢爛な色よりも却つて美しい。

私の大浪に遭つたのは、桑港に着く三日程前の一日であつた。小山の如き浪が寄返るので、さしもの大船も木の葉のやうに動搖したが、幸にも此の日は頗る上天氣で風も無か



春洋丸の音樂室

つたので、甲板の上で其の壯觀を味はふ事が出來た。大西洋の方は一體に山なす巨浪は少いが、米國を去つて五日目あたりかには、暴風雨に類した天氣に出遭つた。要するに、海の景色は取出でて人に語ることは難いが、一度經驗のある

單調
究竟
遠淺の海

布哇公園

者が後日追想すると、單調のやうでも、其の美は千變萬化である。これ實に究竟の歌枕。

陸上の景色は、土地に由つて著しい相違がある。一般には言盡されぬ。布哇の如き、四時氣候を同じうして、太平洋の樂園と稱せらるる地に行くと、滿目の風光一變して、初めての人には非常に面白い。遠淺の海が極めて澄んだ蒲黃の色に見えて、それに椰子の林が背

景にあしらはれてゐる風情は、繪畫で見るよりも、實際の方が餘程美しい。これからの人が、歌枕の一つとすべき所だと思ふ。カピオラニーの公園に遊んだ時、蔚然たる榕樹の下枝に放飼の孔雀が止つてゐて、其の艶な羽毛が、花のやうであつたのを記憶する。

又桑港の港近くなつた海の上、數百羽の鷗が船に沿うて舞つてゐる所から遙かに眺むれば、金門灣頭の大浪が港口に押寄せる有樣、水の屏風を立廻したごとく、海の上にも瀧があるかとも疑はれた。これはた歌枕に逸すべからざるものと思ふ。熱帶地方は言ふまでも無いが、歐米の風光は日本に比して、いたく趣を異にしてゐる。彼の國には、我が國より

蔚然

(一) Golden Gate. 北米合衆國の西岸サンフランシスコ灣に入る海峽。

逸すべからず

桑港金門灣

も草木が尠い。見る山も見る山も、日本のやうには松杉が山全體を蔽うてゐない。あるは芝山の如く、あるは只岩石のみのやうな山の所々に、たま〳〵青々した樹木が十數本繁つてゐるといふ風の景色が多い。それで日本人は動もすれば、我が國の景に草木の多いのを誇稱するが、それは稍偏した見方であつて、両方ともにそれ〴〵

の美しさがあるのは無論である。併しながら、極めて土地の礒硝（かうかく）としてゐるのは、勿論景色が好いとはいはれない。私の通過した米國の一部分は、殊に冬枯の候であつたから、人氣ない物寂しい廣漠の野を行く心地がした。

礒硝

概してあちらの木はひねくれてゐない。皆すうつと直立して、地面を離るゝ數尺の所から、四方に向つて枝が規則正しく手を擴げてゐる。かう規則正しくなつてゐる枝振は、いかにも風趣が乏しいやうであるが、實際はさうでない。

さて米國の歌枕一二を擧げれば、(一)ワイオミングの平原であらう。眼の屆く限り一物もなく、雪がちら〳〵降つてゐる中を、たゞに羊の群が鐵道線路のあたりをさまよふなどは、

(一)Wyoming. 合衆國の西部にある州。平原あり。

優美の景には缺けてゐるが、一種壯大の趣がある。名にし負ふ(一)ソルトレークの鹽の湖を中斷する長路を通ると、平原の間に丘陵の起伏して、雪斑の岩角に朝日の反射する景色、是亦歌枕の價値あるものといはねばならぬ。又(二)コロラドの北、所謂(三)キャニォンの一部は、奇岩大石路傍に轉じて、宛然鬼工と思はれる。此の景も歌枕に逸すべからざるものである。

紅塵萬丈

さてこの歌枕といふ詞は、もう少し意味を廣くして見たいと思ふ。即ち山水の風景ばかりに止めず、進んで紅塵萬丈の市街、煤烟の立昇る工場の光景なども、詩歌に寫し出して面白いと思ふ。例へば、紐育の摩天閣なども、其の或物は建築美を持つて居ないが、中には一種の新しい趣味の徹底して

徹底す

(一)Salt Lake. 合衆國ユター州に在り。
(二)Colorado. 合衆國の一州。
(三)Cañon. コロラド河の峽谷。鬼工

居る物がある。(一)ブルウクリンの釣橋の上から紐育を望むと、建列ねた大廈高樓が雲に聳えて、殊に薄暮は二十階、三十階の窓の灯が、空の星かときらめいて輝く。又はホボーケン(二)の港口、朝霞の景色、夕暮の色、他の國に無い趣味がある。更に進んで人情風俗を加へて景色を見ると、愈好箇の歌枕がある。紐育はマヂソンの大辻、世界の富を集めた繁華な場所に立つて、伊太利の移民が彈く哀れなバレルオルガン(三)の聲を聞くと、聲こそは細けれ、近代文明の弊害を呪ふ切實な音樂かとも聞える。又はヲオルストリートの執務時間に其の邊を通ると、黄金の爲に萬人の血眼になつて狂ふ樣は、賭博場を見るよりも猶慘澹たる感を與へる。

(一) Brooklyn. 紐育市にあり。一八七〇年より約三十年にして竣工せし長さ六五〇〇呎の釣橋。

(二) Hoboken. 薄暮 ハドソン地方の一市。

(三) Barrel-organ. 近代文明の弊害を呪ふ切實な音樂

血眼

又これとは反對に、冬の田舍に入つて見ると、葉は落盡した楓樹の並木路を、雪を蹴つて小學生徒の走つて行く所などは、「若き米國萬歳。」の聲を發したい位、ニューイングランド(一)の田舍の景色は、落着いて若々しい、如何にも懷かしい感を與へる。

二九　世界の歌枕　其の二

歐米の大都會中、どこが好いといはれたなら、誰も〳〵賞めるのは巴里であらう。市街の美觀、道路の整頓は言ふに及ばず、氣候の温和、風光の美、風俗の雅致ある、かういふ所に住んで、詩でも詠んでゐたいとは誰も望む所かと思ふ。シャン(一)

(一) New England. 合衆國東部の人口稠密なるメーン州外五州の總稱。

(一) Champs Elysees. 巴里市の大路。

端麗高雅

車馬絡繹

(一)Seine. 巴里府を貫流してイギリス海峡に注ぐ。

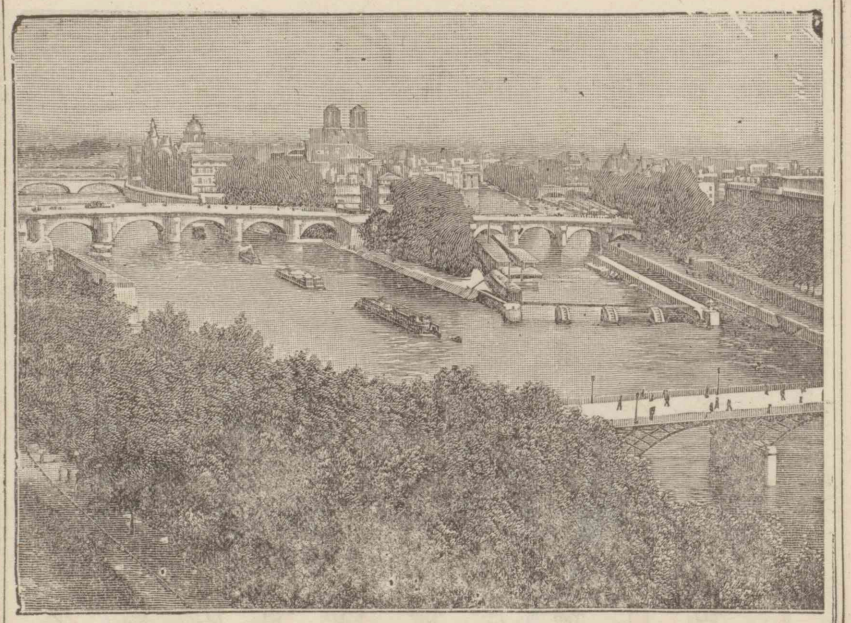
綸を垂れる

(二)Notre Dame. 巴里市内の大寺院。

(三)歐洲にて中古時代に流行せし一種の建築の様式。

(四)St. Michel. セーヌ河に架けたる橋の一。

ゼリゼーの大通は、實に長安の盛時もものかは、端麗高雅世界第一である。歌枕はどこにもごろ〳〵してある。文明の最高に位するは佛蘭西である、而して巴里である。それで又極めて華美な町中にも、何となく仙人めいた趣がある。車馬絡繹たるセーヌ(一)の河の邊に、悠然綸を垂れたる隱君子もある。橋の下には犬の髪結床がある。河岸の石垣の上にはお馴染の古本屋がある。其の他ノートルダム(二)寺の建築は、ゴシック(三)式の標本で、朝夕の色の變化が著しい。嘗てノートルダムの總べての變化を味はうと、一日一晩眺望したこともあつたが、最も美觀を極めたのは夕方で、黄金の光の波を浴びた景色を、サン・ミシエール(四)の橋から眺めた。又夜のしら〳〵あ



巴里市街

けに朝風の心地よく頬を拂ふ時、之を望むのも好い。眞珠の色を曇らせたやうな色から、薔薇色のはでやかなのに至るまでの色合の微かな影を味はふ事が出來る。其の外花を賣る老媼の風、シアルロットの帽子を被つて、ボールの箱を抱へた店通ひの賣子の姿、

時勢粧

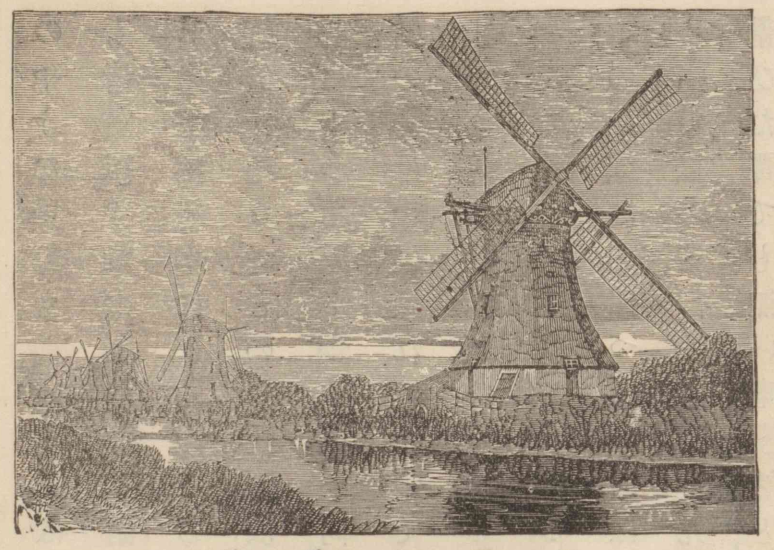
(一)Turner. 英國の風景畫家。(西暦一七七五—一八五一)

リッチモンド丘よりテムス河を望む

ペシロンといふ牛よりも大きい馬を曳く馬丁の振、夜半近く芝居のはてた後に雨が降つて、幾千の街燈の光が敷石に映る所、自動車は唸り、馬車は軋る不夜城の壯觀。滿目の時勢粧、皆歌枕ならぬは無き趣である。

倫敦は景色の地として、餘り人は賞めないが、色彩の變化、其の色合の豐な點は、ターナー(一)の繪にある通りで、風俗美は尠い

(一)Thames.
(二)Richmond.
(三)Napoli. ナポリ州の首府。同名の灣に臨む。



和蘭の風景

が、光線の變化ばかりは味はふ値がある。併し同じく風光を味はふにしても、住心地よい巴里の方が、あらゆる旅客の賞揚する所だと思ふ。唯倫敦にもテームス(一)上流のリッ(二)チモンド邊からの両岸の風景には、英國特有の美觀が現れて居る。此の他風車、朱い屋根、清き淀に名ある和蘭もよく、伊太利にはナポリ(三)邊の夢

のやうな景色もよい。瑞西は風光明媚と稱せられる國で、誰も皆賞揚するが、私は寧ろ南獨逸を採る。南獨逸ザルツブルヒの景は日本によく似てゐる。要するに、何處が一番風光は絶佳であるかといふ問題は、一概にはきめ難い。見る人々の心によつて、天下到る處、如何なる地、如何なる所と雖も、皆相當の美は味ははれるものである。浪の烈しい英海峽の船の上でも、暑さ堪へ難い紅海の甲板でも、見る心によつてそれぞれの美しさが感ぜられる。元來歌枕などと取出でてきめるのは、或は間違つてはゐはしまいか。天下皆歌枕ではあるまいか。私の旅行は、學術研究の爲でもなく、又特別な使命を帶びた譯でも無い。唯漫然と飄遊したので、感覺を通して印

(一) Salzburg. 墺地利の西部。東アルプス山脈の北邊。山水秀麗の地。

(二) Red Sea. アラビヤとアフリカとの間にある細長き海。

飄遊

民庶
準則
情意
道心

象を捉へただけである。

—心の花—

三〇　諺と道德

諺は廣く一般民庶の間に行はるゝ一種の格言にして、常人は之を準則として、善惡理否を判じ、進退動止を決する等、其の勢力著大、世人の行爲を指導し、情意を左右すること多し。「鷹は死すとも穗は摘まず。」「武士は食はねど高楊枝。」の如き、武士道の精神を發揮し、國民の廉耻心を養成したる功頗る大なり。衣食のために動もすれば道心を失ひ、卑劣の情を發するに際し、此の諺に鑑て自ら耻ぢ、過なきを得たる類、蓋し、少からざるべし。而して諺の敎ふる所は、利害得失を計較し

直前邁往

意料外

(一) Wander. 獨逸の人。獨逸俚諺辭典五冊なる作る（西暦一八〇三―一八七九）

自己を中心とし、危險を避け、失敗に陷らざるやう、警戒を與ふるもの多くして、善に向つて直前邁往の意氣を皷舞する類は割合に少く、禍福の常なく、希望の實現し難く、人智の不完全にして、世事の意料外なること多きを說きて、人の注意を促す類、多數を占むるに似たり。

金錢の出入、用途、利弊等は吾人が日常の生活と密接なる關係あるを以て、各國共に此の類の諺に富み、ワンデル(一)は金錢に關する俚諺を採錄すること、千六百餘に上れり。概して節儉力行を奬勵して、「塵積りて山をなし、」「雀の巢もくふにたまる」の理を敎へ、「稼ぐに追ひつく貧乏なき」を唱說して、「湯水の如く財を使ふ」愚を戒むれども、ひたすら蓄財に耽りて吝

陰德陽報

嗇に陷る弊を指摘して、「金の番人」となり、「寶のもち腐り」となり、「小利大損」を招き、「一文吝みの百失ひ」たるを戒む。又一朝にして金を得んとする者の不正の手段を用ふるに至り易きを戒めて、「一年の內に富まんとする者は半年の內に刑せらる」といひ、「財悖りて入るものは又悖りて出で、」「惡錢の身につかざる」をいふもの頗る多し。支那の「空裏得來空裏去。」獨逸の「得たるが如く失ふ。」及び「不義の一錢は正義の一兩を滅す。」西班牙の「人の物は主を戀ふ。」皆これなり。「陰德あれば陽報あり、」「積善の家には餘慶ある」意を語りては、「門の外より施せば窓の中へ戻つて來る。」といひ、「慾に頂なく、足ることを知らずして終に身を滅すに至る」べきを諭して、「慾の鵜股さける。」とい

清涼劑
(Talmud. 猶太の古典。教訓の義。)

防腐劑

濫與

金を積みて北斗を支ふ

ひ、「貪慾は袋を破る。」といふ。

「金もち金をつかはず。」庫中徒に菌を生ぜしめ、唾壺と汚穢を爭ふ者の爲に一服の清涼劑たるべきは、(一)タルマッドの「施與は富人の鹽。」といへる一語なり。空しく蓄積して世用をなさず、財を腐らせ、併せて身を腐らす者にありて、施與慈善は絶好の防腐劑たらずんばあらず。諺はかくの如く施與分財を勸告すると共に、其の方法について周到なる注意を忘れず、「大風に灰を撒き、」「唐へ投金、」「淵へ鹽を投ずる」が如き無謀の慈善濫與を警戒して、與ふる者、受くる者、共に中庸を得べきを敎へて曰く、「手から蒔いて袋から蒔くな。」「明日もやれる程今日もやれ。」と、「金を積みて北斗を支ふとも、冥途のみやげ

鞭撻す

成敗利鈍

とならず」、「財貨も亦無常の敵を如何ともする能はざる」を說いて、伊太利には「壽衣にかくしなし。」露西亞には「黃金も天に飛ぶべき翼なし。」といへり。

財產、地位、名望等すべて自己の利益となるべきものについて、自ら力めずして妄に他を羨み、徒に「隣の寶を數へ」、「牡丹餅の棚より落下する」を望み、「天の落つるを待つて雲雀を捕へんとする」が如き卑屈なる惰心を鞭撻し、獨立自尊、克己、忍耐等の諸德を皷吹する男らしき諺少しとせず。「男は裸百貫」なり。自ら奮つて自家の天地を開拓すべし。「成敗利鈍は天なり、」「世は七轉び八起き」なり。「男の心と大黑柱は太い上にも太かれ。」「當つて碎くる」覺悟なかるべからず。「樂は苦の種、苦は樂

異口同音

俯仰天地に愧ぢず

の種。「不受苦中苦、難爲人上人。」の如き、いづれも異口同音、盛に黽勉努力の德を敎ふるにあらずや。「稼ぐに貧乏追ひつかず。」「蜂蜜々々と連呼するのみにては、蜂蜜は口中に來らず。」「神は自ら助くる者を助く。」「怠け者の頭には神宿らず。」汝の務むべきを務めて、然る後其の結果を天に委ねよ。自ら助けずして、神の助を呼ぶの權利なし。希臘の古諺にいはずや、「神を祈らば自身も働け。」と。

「我が物食へば竈將軍」なり。我が汗に食ひ、我が家に居る、俯仰天地に愧ぢず、誰か得て我を左右するものぞ。「われに口あり。人に囑して吹かしむる勿れ。」とは、自ら事を處するの快を敎ふる西班牙の諺なり。

璫々

一片耿々の心

(一)孟子の語。

一敗を以て志を挫くべからず。財を失ふとも憂ふるに足らず。地位名望を失ふも尙可なり、意氣精神を失ふに至りては救ふべからず。「帽を失ふとも、頭を失はず。」「指環を失ふとも指は存せり。」物を失ふも、我を失はざれ。指環は再び得べし。指は改め作るべからず。帽子なきも頭は頭なり。指環なきも指は指なり。璫々たる外觀、何ぞ我を煩はさん。時不可にして一旦下位に居るも、一片耿々の心猶存するものあらば、再び靑雲の上にあるべきなり。若き人々よ、自ら賴んで事を成すべし。然れども、「(一)鎡基ありといへども、時を待つには如かず、」「人事を盡して、徐に天命を待つ」の度量なかるべからず。「果報は寢て待て。」とは正に此の意なり。自ら爲すべき所を爲して、多く

天賚

期待せざる者は、おのづから神寵を得て、天賚を得べし。泰西の古諺にこれあり、「睡者の網に魚たまる。」と。

薫蕕相混ず

俚諺には薫蕕相混じ、正に相反するあり。されば俚諺の訓戒を信條とせんとする者は、其の一方の教訓に執着して、一切を顧ざるが如き愚に陷ることなく、相反する諺をも參酌して、所謂「太鼓をうてば鐘が外れる」の陋を演ずる勿れ。又「毒食はゞ皿まで。」「濡れぬさきこそ露をも厭へ。」の如き自暴自棄の惡諺を以て、己の罪過を辯護せんとするが如きことなく、能く其の佳良なるものを奉じて、遷善進德の具となすべし。

信條

參酌す

自暴自棄

遷善進德

同一の俚諺も、其の解釋應用の如何によりて、毒となり、藥となること、猶同一草木の花中より、「蜂は蜜を吸ひ、蜘蛛は毒を取り、」「牛は水を飲んで乳となし、蛇は水を飲んで毒となす」が如し。戒めざるべけんや。

——藤井乙男、諺と道德による——

郷士

三一　三井家創業の賢婦人

富豪三井家の祖先を尋ぬるに、今より凡そ三百年以前、伊勢に三井越後守高安といふ人あり、元は近江國佐々木氏の一族なりしが、故ありて伊勢に來り、土地の郷士となれり。高安の子高俊始めて松坂に酒店を開きて、次第に産を興し、其の子高利の代に至りて、呉服業並びに両替を營み、家業益〻繁榮せり。

そも〳〵三井家の創業の裏面には、賢母良妻の助ありし

ことを忘るべからず。高俊の妻は永井氏にて殊法といひ、高利の妻は中川氏にて壽讃といふ。二人共に世にも稀なる賢婦人にして、三井家の今日あるは、此の二婦人の力、與つて多きに居る。

與つて多きに居る

殊法は夫の慣れぬ商法を助けて、微々たる酒屋より遂に松坂城主古田大膳の御用を勤め、越後屋の屋號を以て知らるゝに至れり。其の間の勤勉と忍耐とはもとより尋常一樣のものにあらず、質素儉約を家政の大本と定め、親切正直を商法の要訣とし、夫に對しては貞淑、子に對しては慈愛、主婦として缺くる所なき美德を備へ、且善行に富みたり。切棄てたる元結の先を拾ひ置きて觀世捻とし、半紙の一帖毎の間

要訣

觀世捻

にある隔ての藁を集め置きて油揚を造りし時の仕切とし、擂鉢の底の抜けたるは樋の受筒とし、水柄杓の底の抜けたるは茶壺の尻敷となしゝ等、些細の物をも麁末にせず、常に廢物利用の工夫を凝せしが如き、其の用意の周到綿密なりし一斑を知るに足るべし。

輯睦

又寒暑を問はず朝早く起きて水浴をなし、それより神佛を禮拜するなど、專ら修養を力めしが、四十四歳の時夫高俊に後れし後は、愈奮發して、親ら家業を經營し、一家を理めたり。高利の成長するに至るまでの此の寡婦の努力奮鬪は、到底尋常婦人の企及すべからざる所なりき。

此の賢母の手に養育せられたる高利は、婦德に於て其の母にひとしき賢女壽讃を其の妻とせり。壽讃は姑に仕へて貞順、よく其の家風を守りしのみならず、十五人の子女を養育するに、寛嚴宜しきを得て、一家輯睦、まことに圓滿なる家庭を成し得たり。此の頃には家稍富みて何不自由なき身分なりしかど、尙子供等の衣服は絹類の小袖一枚、染帷子一枚

首途

を晴着として、其の外はすべて木綿物を用ひ、自己の用としては一年に一枚も新しく作ること無かりき。多くの召使を使ふにも、極めて親切にして、冬の夜寒を犯して出行く者ある時は、自分の羽織を脱ぎて之に着せ、旅行する者には、如何に早朝の出立にても必ず、自分も早起して首途の馳走をすむる等、些細なるに似たれども、皆尋常人の爲し難き事なりとす。又雇人の中にて高利の機嫌を損ぜし者ある時は、常に中間に立ち、其の者の爲に詫びて、向後を愼ましめしかば、何人も皆其の恩義に感ぜざるは無かりきといふ。

三井家が質素儉約を家風とし、同族の親睦を家憲とし、累世益繁榮して國家に貢獻すること多きを得たるは、畢竟當

初の二代の遺業を繼承したるに外ならずして、此の隱れたる二賢婦人の力の多大なりしを知るべし。

自修文

三二　日本の婦人と歐米の婦人

幣原坦(一)

(一)文學博士。河内の人。現文部省圖書局長。

我が國の婦人は、歐米に於て頗る評判が良い。然らば、歐米人はいかなる點で、日本婦人に感服するかといふに、第一「きもの」といふ言葉が彼等の流行語(はやりことば)となつてゐるのを見ても、我が國の婦人の服裝が、已に一種の美感を與へてゐることが分る。更に日本婦人の、己を捨てゝ家の爲に盡し、男子の爲に盡す所の犧牲的精神に至つては、特に歐米人の感動を惹くものと見えて、近頃彼の地に於て演ぜられる日本婦人に關する演劇は、多く此の犧牲的方面をあらはして居る。これ歐米に於ても、動もすれば婦人らしき婦人を要求する聲が起らうとするに際して、日本婦人は即ち此の要求に合するが如き觀があるからではあるまいか。

併し彼等の我が婦人について感服する點は、まだ頗る漠然たるもので、婦德の詳細なる點には考へ及んで居らぬ。一體我が國に於て婦德として最も重く考へられたのは、此の婦人らしき婦人といふことである。即ち我が國の婦人は歐米の婦人に比して貞淑である、温良である。そして少しも勤勞を厭はない。大抵の家庭に於ては主婦は自ら拭掃除をし、子供の世話、洗濯に至るまで、一々之を行ふのである。

さて又我々が歐米の婦人を見て羨ましく思ふのは、まづ體格の强健な事である。歐米の婦人は姿勢からしてしやんとして居て、行動も敏活であるし、氣分もしつかりして居るやうに見える。又教育の程度の高い故か、大體に於て判斷力にも富んで居る。中

愚痴　おろか。ばか。
社交　世間のつきあひ。
憂身を窶す　其の事に熱心になつて自分で苦しむ。
(一)西暦一八七〇年(明治三年)西班牙の王位繼承問題に關し佛蘭西と獨逸との間に起つた戰爭。

には隨分愚痴な婦人も居るけれども、平均して見れば、我が國の婦人よりも物判りが早くて、はつきりしてゐる。但し一面には、歐米では社交が盛である爲に、婦人社會に華美奢侈の風が行はれ易い。だが又、其の家庭の內情をよく窺つて見ると、大いに儉約をつとめて居ることが分る。或英國婦人は「交通機關の發達と共に外國の贅澤品が盛に英國に入込むから、之を防ぐ爲には、成るべく自國の品で間に合せるやうにしようといふ申合せをして居る。」といふ話をして居た。

巴里の婦人は隨分贅澤をして、身體の裝飾に憂身を窶して居るやうにいはれてゐるが、實際それは或一部の人、又は外觀上のみのことであつて、普通の家庭にあつては、なか〳〵儉約である。冬物を仕立直して夏着にするとか、或は同じ着物を染直して着るが如きことは、我が國と同じであつて、殊に田舍の家庭に至つては、極めて儉約なものである。(一)普佛戰爭で莫大な償金を獨逸から要求されたにもかゝはらず、立ちどころに之を拂ひ得た所以は、こゝあると頷かれる。

獨逸の婦人が平生絹物を着ないとか、十四金以上の物を帶びないとかいふことは、誰も知つてゐる通りである。自分が嘗て或大學教授の家に招待されて行つた時なども、夫人が自ら燈火をつけたり、いろ〳〵の世話をして居られるのを見て、何となく我が國の家庭を見るやうな快感が起つた。そして何處までも質朴健全といふ理想を失はないやうにしなければ、一國の富强は圖り難いものだといふことを、今更の如くに感じた。

歐米に於ける婦人の位置が、我が國に於けるよりも一般に高いことは、言を待たざる所であるが、これは婦人の智能が概して高い故でもあらう。現に歐米の婦人は男子よりも知識の發達に往々便利な事情がある。何故かといふと、學校は男女共に同じ程度の處を卒業するにしても、卒業後、男子は外國へ行くとか、職業

生計（くらしの道。なりはひ。すぎはひ。）

標的（めあて。まと。目的。）

に從事するとか、とにかく生計を營むのであるけれども、女子は男子のやうに遽（にはか）に外國へ行く事も出來ずまた直ちに荒い仕事に從事することも出來ず、家庭に居殘つては餘暇に書物を讀む、即ち讀書の習慣は學校を出た後も、依然として續いて行くから、自然智能が發達するやうになるのである。

次に職業問題に就いて考へて見ると、歐米の婦人は隨分獨立生活をしなければならぬところから、それ相應の職業を求める必要がある。女子の職業教育はこゝに於て一つの問題となるのである。我が國の現狀では、婦人が獨立生活を餘儀なくされるまでにはなつて居ない。そこで女子教育の標的（めあて）は良妻賢母といふことになつて居るので、今日のところ、主として家庭の主婦たる素養を必要とするのである。併し其の家政を整理するについては、家庭の副業といふ事を一應心得て置く必要があると思ふ。我が國で早くから奬勵された養蠶なども、副業の一つである。爪哇（ジャワ）の更紗製造及び竹細工なども、輕々に看過してはならぬ。歐米で見ても、婦人が家庭で作る品物はなか〳〵少くない。佛國の上流社會の家庭では、稍娯樂的に刺繍、繪畫を試みるやうであるが、中流社會の家庭では、眞面目に刺繍や編物をする。又中流社會でも獨逸の婦人になると、教師、辯護士、醫師など殆ど男子と異ならざる職業に從事して居る。一層餘裕のない社會に至れば、刺繍、編物は勿論、仕立物、繕物（つくろひもの）、洗濯、造花、婦人帽製造など、生計の補（おぎなひ）になることとは何でもするが、此等の女子の所得は、仕事の種類と巧拙とに依つて一樣ではないけれども、まづ一日に二（一）フラン半から五フラン位まで、即ち平均四フラン餘の收入を得るのである。

主婦が料理をするのは普通であるのみならず、鄭重（ていちよう）にすべき客には、特に主婦の手料理を用ひるのが禮である。東鄕大將が先般米國に回航された砌（みぎり）、一夕ルーズベルト（二）氏に招待された。其の時の御馳走などは、誠に簡單なものであつたが、何れもルーズベ

（一）一フランは我が三十八錢。
鄭重（ていちよう）ていねい。
砌（みぎり）際。時に。をり。
（二）當時の大統領。

ルト夫人の手料理であつたといふことである。――世界小觀――

三三　獨創力

三宅雪嶺

元旦は、世界各國で年の初を祝するものであり、紀元節は日本帝國の起を祝するものである。何處でも建國祭の如きことがあつて、日本在留の米國人も、(一)七月四日に祝賀することに定まつて居る。日本の紀元は歷史上の穿鑿で幾分の疑問があるが、とにかく日本帝國は二千餘年前に成立したに相違なく、其の以後種々の變遷がありながら、漸次發達し來つて居る。他の東洋諸國は發達を續けず、退歩せぬまでも停滯した形であるが、獨り日本は發達を續けて來て、一旦外國

(一)米國獨立祭日。

穿鑿

停滯す

と接すると共に愈發達し、遂にこれと對等の地位に進んだ。若し一層早く列國と交つて居つたならば、更に發達の跡が著しかつたであらう。日本には發達の素質がある。

紀元節は國家の紀元であるが、紀元といふことは何事にもある。多數が記憶すべき大紀元があり、少數が記憶すべき小紀元があり、一家一人亦各紀元がないとはせぬ。誕生日は個人の一紀元である。明治元年は國家にも社會にも種々の點で一の紀元になり、二十二年の憲法發布も一の紀元になつて居る。其の他汽車には汽車の紀元があり、電信には電信の紀元があり、又(一)ニウトンの重力發見なり、(二)ダルウヰンの自然淘汰說なり、亦皆それ〴〵紀元を作つて居る。

對等の地位

(一)Sir Isaac Newton. 英國の數學者、理學者。(西曆一六四二―一七二七)

(二)Charles Robert Darwin. 英國の博物學者。(西曆一八〇九―一八八二)

紀元に種々あつて、一樣にいへぬにしても、何等か前に無かつた所が、新に知れ渡るのを意味して居り、稍神の創造に類する。傳說に據れば、昔神が「そこに光あれよ。」といつたので、暗闇が明るくなつたといふことであるが、創造とはかゝる類を指すのである。無より生ずると認められる。此の創造に因んで、人事の上で創造の語を使ひ初めたが、日本では普通に獨創といふ。

進步は總べて多少新なる分子を加へるもので、人々の獨創力を發揮するを要する。何處かで何人かゞこれを發揮すれば、それだけ或進步を見る。必ず何處の誰と當にする譯に行かず、之を當にしては、其の人が居らねば進步がないことになる。社會が絕えず進步するのは、或特別の人に由りて遂げられるのでなく、多數の獨創力が集つて現れる結果である。獨創力の目立つものこそ少いが、目立たぬのは、幾らでもある。實は何人でも幾分の獨創力がある。唯極めて微弱で、殆ど全くいふを値せぬ。値せぬけれども確かにある。これが相集つて著大なる事業となることがある。

女でも男でも、多數の人が各少しづつ獨創力を發揮すれば、おのづと其の中から著しい力が現れる。新發明の機運といふのは其處である。多數が各自の獨創力を發揮する勢になつて來て居るのを指す。歐洲の近世史は、其の機運の熟したに外ならぬ。中世千年間、これぞといふ發見發明なく、近世

値す

に入つて、俄に發見發明の數ふるに堪へぬ有樣となつた。人人皆從來の儘にして居れず、何とかせねばならぬと考へたり、働いたりするのが、かゝる勢となつて現れたのである。東洋は彼の中世と同じ狀態であつて、彼の近世の活動に促されて、是亦各自の獨創力を發揮しようといふ事になつた。

所が日本では東洋第一を以て居りながら、唯歐米の眞似して何等の獨創の見るべきもの無いといふが、これ格別怪しむべきでない。彼の近世史は、日本より幾百年も早く始り、其の早く始つたのは、地中海を控へて、航海に熟練する便利があつたのであり、又大西洋が割合に狹くて、早く米洲を發見し得たからである。大西洋が太平洋ほど廣かつたならば、

(一)コロンブスは米洲を發見せずに歸つたか、又は途中で殺されたかして居る。何にしても歐洲では新世界發見といふので、人心が亢奮し、從來の狀態から新なる狀態に移るの餘儀なきに至り、夫だけ新發明新工夫を重ね、日本で思ひも寄らぬ事が出來上つた。

(一)Christopher Columbus.（西暦一四三六―一五〇六）

亢奮す

日本で後馳せに其の仲間に加つては、新に發明するよりも、出來上つた處に倣ふのが早い。既に出來上つて居るのに、わざ〳〵自ら苦心して發明するに及ばぬ。出來上つて居る物を其の儘に取るのは、當然のことである。これまで日本に獨創力の現れたものゝ少いのは、出來上つた物を取入れるに忙しくて、自ら獨創をする暇がなかつたのである。

拘泥す

水は高い處から落ちて平均しようとする。今日まで文明が平均しようとして居つた。今日でもまだ十分に平均せぬが、肝要なことは略平均して居る。是から獨創の現るべき時になつて居る。學ぶべきものは幾らでも學ばねばならぬが、今は獨創の餘力が生じて來た。此の頃教育を受けつゝある者は、男女を問はず、大いに獨創力を發揮すべき運命になつて居る。

所が人は動もすれば獨創の文字に拘泥して、獨り創めることゝ解したりする。何とかして、全く前例無い物を始めようと思ひ立つ。しかし特別に飛離れた事を考へねば獨創にならぬと思ふのは間違つて居る。前に人がせつかく苦心慘

羅列す

憺して考へた所の物を、更に繼續して苦心慘憺する所に、後の人の職分がある。前に殘した所より、より以上に効果あるやうにすれば、夫だけ後に生れた者の職分を果すことになる。其處に獨創力があらはれて居る。

それならば、歐米に出來上つた所を學び、少しく改善を加へればよいかといふと、其處は心掛次第である。他を學ぶに專らになれば、依賴心が多くて獨創力が減ずる。他を學びつつ、常に自ら工夫する習慣を作らねばならぬ。文藝上でも、頻に歐米の新刊書を讀むがよい。併し讀むに專らになつて、甲がかういつた、乙がかういつた、丙、丁はかく〳〵であるといふのを羅列するばかりになれば、所謂習ひ性となり、受賣ば

かりになつて、獨創力が萎縮してしまふ。此の類の事に注意を拂ふもよいが、自ら工夫するを怠つてはならぬ。

世界大戰が始つた時、歐洲から今まで來て居つた機械、藥品が急に到來しなくなつたので、此の種のもので、日本の內地で造り上げられたのが澤山ある。前に依賴して居つたのが、依賴出來ないやうになつたが爲に、かうなつて來たのである。依賴心さへ棄てれば、結構物が成遂げられる。今後はいよいよ此の勢を以て進むべきである。今から新に知識を積み、世に打つて出ようとする者は、男でも女でも、此の邊の覺悟を最も肝要とする。

前には獨創力があつても、之を發揮する機運に臨まなかつたが、今後其の機運が大いに熟する。其の點に於て、現代の青年は希望を以て充たされ、洋々乎として春の海を望むが如く祝福し得られる。唯幸福に困難の伴なふを忘れてはならぬ。

—內實の力—

改訂

女子國文卷六

終

通用字及び正字對照表

（茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。）

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
両	兩	効	效	寇	寇	挿	插	潤	閏
仭	仞	即	卽	寶	寶	擯	擯	潛	潛
侯	侯	郷	鄉	尅	剋	攅	攢	陰	陰
免	免	卿	卿	帽	帽	攜携	攜	熔	鎔
兎	兔	厨	廚	并	幷	整	整	猿	猨
冐	冒	厩	廐	屏	屏	既	既	猪	豬
決	決	収	收	稟	稟	昂	昂	猫	貓
准	準	況	況	叙	敘	往	往	晋	晉
凉	涼	器	器	慨	慨	概	概	桿	杆
減	減	噴	噴	憇	憩	欵	款	留	畱
函	函	塲	場	懺	懺	殲	殲	畫	畫
及	刀	塚	冢	戲	戲	氷	冰	痴	癡
剪	翦	墻	牆	拿	拏	温	溫	皷	鼓
劔	劍	寃	冤	扱	拔	濵	濱	盃	杯
								纖	纖

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
纏	纏	脇	脅	蒲	蒲	讖	讖	輙	輒
罰	罰	致	致	蔭	蔭	讐	讐	隣	鄰
羣	羣	皐	皐	衛	衛	象	象	鎖	鎖
羹	羹	舗	鋪	褒	褒	賓	賓	間	閒
耻	恥	舘	館	覇	霸	賛	贊	隙	隙
聟	婿壻	艶	艷	解	解	贋	贋	隷	隸隸
脈	脈	莽	莽	記	記	軟	輭	駄	駄
鬪	鬪	腸	腸	萠	萌	鐵	鐵		
鬱	鬱								

同字表（いづれにてもよし）

並	並	万	萬	厠	廁	婚	婚
亡	亡	京	京	埃	埃	姉	姉
嚊	嚊	坂	阪	野	埜	妍	妍
叶	協	嶋	島	庵	菴	妊	妊
峯	峰	柿	柹	基	棊	忘	忘
村	邨	案	按	棕	椶	冨	富
毘	毗	烟	煙	無	无	楫	檝
汗	汚	粕	粽	糾	糾	狸	貍
筍	笋	競	競	紅	紅	網	網
朴	樸	稿	藁	總	總	稽	稽
岳	嶽	普	普	橋	橋	樂	樂
略	略	紀	紀	穀	穀	繼	繼
癡	癡	繽	繽	冲	沖	勅	敕
傲	傲	俟	竢	京	京	亡	亡
並	並	叶	協	厠	廁	婚	婚
考	考	慙	慚	冨	富	忘	忘
概	概	稿	藁	楫	檝	棕	椶
基	棊	案	按	烟	煙	狸	貍
狸	貍	紅	紅	網	網	總	總

羈 羇 羈 花 華 紆 袵 谿 溪 遁 遯 雁 鴈
舩 船 荒 荒 訛 譌 踪 蹤 鉾 矛 雞 鷄
艫 櫓 虱 蝨 譁 嘩 躊 躇 銹 鏽 駈 驅

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラルヽモノ。其ノ中＊標ヲ附シタル文字ニ限リ、慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ

＊瓦（コウ）亘（クワン）
ワタル。「連亘」
桓ニ同ジ。

＊体（ホン）體（タイ）
笨ニ同ジ。アラシ、麁、粗。
カラダ。

＊但（タン）但（シヨウ、シ）
タヾシ、タヾ。「但馬」
ツタナシ、拙劣。

＊僣（セン）僭（センツ）
ミダリガハシ、猥。
自分ヲ越エテオゴル。「僭越」

＊冑（チウ）胄（チウ）
カブト、兜。「甲冑」
ヨツギ、嫡子。又子孫。「冑裔」

＊協（ケフ）恊（ケフ）
カナフ、叶。
オビヤカス、脅。

＊刺（シヤキ）刺（ラツ）
サス。「刺殺。刺客。名刺」
モトル、ソムク、乖戾。「亞刺比亞」

台（タイ、ダイ）臺（タイ、ダイ）
星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」
ウテナ、ダイ

＊后（コウ、ゴ）後（コウ、ゴ）
ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
キミ。「皇后」

商（シヤウ）商（キ）
アキナヒ。
モト、本。

壺（コ）壺（コン）
ツボ。
ミチ、宮中ノミチ。

＊姫（シン）姫（キ）
ツヽシム。
ヒメ。

＊托（タク）託（タク）
拓ニ同ジ。オス、ヒラク。
ヨル、タノム、ユダヌ、カコツケ。

＊担（タン、ケツ）擔（タン）
ハラフ。又アグ。
ニナフ、カツグ。

改（カイ）改（イ）
鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
アラタム。

槍（サウ）鎗（サウ）
ヤリ。
鏘ニ同ジ。鐘ノ聲ノ形容。

欠（ケン）缺（ケツ）
アクビ。「欠伸」
カク。「缺席」

糸（ベキ）絲（ケツ）
ホソイト、細絲。
イト。

羨（イ）羨（ヤン）
支那ノ地名。
ウラヤム。

＊虫（キ）蟲（チユウ）
魚介類の總稱。又マムシ。
ムシ。

＊詫（タイ）詫（タイ）
ワビ、ワブ。「詫狀」
詑ニ同ジ。アザムク。

＊詔（テン）詔（タウ）
ヘツラフ。
ウタガフ、疑。

＊證（ショウ）証（セイ）
アカシ、シルシ。「證明」
イサム、諫。

豐（レイ）豐（ホウ）
禮ノ古字。
ユタカ。

＊迄（キツ）迄（キツ）
マデ。
ユク、行。

＊選（セン）撰（セン）
エラブ。（ヨリトル）
エラブ。（書物ヲ編纂ス）

郤（ゲキ）　ヒマ、隙。
郤（キヤク）　シリゾク。「退郤」

鍛（タン）　キタフ。「鍛錬」
鍛（カ）　シコロ、「鍛」

宛字（左の如き字は假名を使用するをよしとす）

おぼつかなし　覺束なし
かひ（詮の意の場合）　甲斐
きつと　屹度
さすが　流石、遉
しまふ　仕舞ふ
せつかく　折角
だけ　丈
だめ　駄目
ちやうど　丁度
ちよつと　一寸、鳥渡
でたらめ　出鱈目
とう〳〵　到頭
とかく　兎角、左右
とて、とても　迚
とにかく　兎に角
なか〳〵　中々、却々
ふるまひ　振舞
はかなし　果敢なし
ほんたう　本當
むだ　無駄
むづかし　六ケし
やたら　矢鱈
やはり　矢張

附錄終

大正六年十月二十七日印刷
大正六年十月三十日發行
大正七年一月十六日訂正再版印刷
大正七年一月十九日訂正再版發行
大正十年十月十八日改訂印刷
大正十年十月二十一日改訂發行
大正十年十二月廿三日改訂再版印刷
大正十年十二月廿六日改訂再版發行
大正十三年十月十五日改訂三版印刷
大正十三年十月十五日改訂三版發行

改訂女子國文奥附

定價	
卷一＝卷四、各金四拾錢	
卷五　卷七、各金參拾八錢	
卷六　卷八、各金參拾七錢	
卷九　卷十、各金四拾錢	

大正十四年度臨時定價

卷一＝卷四、各金七拾貳錢	
卷五　卷七、各金六十八錢	
卷六　卷八、各金六十七錢	
卷九　卷十、各金七十貳錢	

大正十年度定價金六錢參錢

著作權所有

編者　賀川矢一
東京市神田區通神保町九番地

發行兼印刷者　合資會社　冨山房
合資會社冨山房社長

代表者　坂本嘉治馬
東京市小石川區音羽町七丁目六番地

印刷所　冨山房印刷工場

發行所　東京市神田區通神保町九番地　合資會社　冨山房
電話大手六三七〇、七〇二三番
振替東京五〇一番

広島大学図書
2000064442